

とする高尚な抱負——他を幸福にするばかりでなく、又自分の幸福でもある社會的色調を帯びた目的」(アーノルド)の爲には決して無駄ではないのである。

パットラー監督曰く「人生には我々が人と共に常に楽しんで居る祝福がある、即平和充實、自由、健康的な時候等である、吾々人間に與へられた眞の仁慈を精確に考へると普通の恵も嬉しく考へられるのである、それは吾々が他の人を愛する程度で、其人の興味、喜悅、悲哀は又自分のもの、様に思へるからである、吾々が只一個人の利益を思ひそれを自分のものと考へるのは私愛から起るのである、吾々が隣人を愛する事は其人の利益と安寧とが自分にも適應し、又彼の幸福にも吾々が實際分擔する様に考へられる事を教へるのである、斯の如く博愛主義は、われ／＼に同國人の利益の爲に氣をつける事を教へるのである。

マーカス、オーレリヤスの金言に「汝の中にある神を若き者にも老いたる者にも同様に人間の守護者としようではないか、政治に干渉する人にも、ローマ人にも、又は此の世から彼を召し給ふ神の信號を待つて居る様な位置の人にも、又は人の論據や誓に由ある、吾々は

善をなせし樂を知れり。(ゴールドスミス)

努力して、及ばすながら吾々の私人的利益を公共生活の大なる利益に注ぐ事は偉大な事ではあるまいか。世の中には困難を與へる人と苦しみを自分に取る人とがある、苦しみを人に與へる人は自身にも又それが返つて来る、而し苦しみを他人の爲に取る人は自身の苦が軽くなるのである、もし望めば何人も勇敢な人にも、尊敬すべき愛國者にもなり得る、各人は同國人の利益となる運動の何れかに、多少あづかつて居るのであつて、同國人を健康に、幸福に、又善良な生涯を送る様に、助力する事が出来るのである。

これをしてこそ吾々は、早晚確に自問する次の問題に満足な返答をする事が出来るのである——

正義と眞理の爲に、
 神と人との爲に、
 汝は何をなせしや？
 望に満ちたる若き日より、
 盛の年に至る迄。

(ホイットティア)

第十二章 社 交

英國人の家が各自の城廓であるのは吾々の誇りである、而しそれよりも、もつと優れたものにせねばならぬ、即ち家庭と成らねばならない、家が城廓であるのは法律に由つて與へられた権利であるがそれを眞の家庭にするのは各人の責任である。

然らば家庭を造る要素は何であらうか、即ち愛と同情と信用とである、稚き日の思ひ出、父母の慈愛、青年時の赫々たる希望、姉妹の誇り、兄弟の同情、助力、相互の信

用、普通の希望、興味、悲哀等が家庭を造り家庭を淨化するのである。

愛のない家は城廓又は宮殿の様であるが楽しい家庭ではない、愛は實際家庭の生命である、肉體に靈魂がなければ人間でない様に愛の無い家庭は眞の楽しい家庭ではない

心の權べる者は恒に酒宴にあり、

すこしの物を有てエホバを畏るは、

多くの寶をもちて擾煩あるに愈る。

蔬菜をくらひて互に愛するは

肥れたる牛を食ひて互に恨むるに愈る。

※

※

※

※

※

陸じうして一塊の乾けるパンあるは、

あらそひありて宰れる畜の盈たる家に愈る。(箴言)

吾々が家庭を尊ぶのは權威者又は政府の専横な權力よりの城廓としてではなく、世の中の心づかひと不安からの隱家として、又浮世の荒波を渡る時に何うしても逢はねば

ならない暴風雨を避ける、静けき港として尊重するのである。
最も成功した生涯にも不幸は起るのであつて、繁榮のみが幸福と平和を持ち来らずと云ふ事は決してないのである。

人は孤獨を守る爲に造られはしなかつた、エデンの園にてさへも孤獨ではなかつた、「同じ空の下に居つても孤獨では何かせん」とベルナルダン、下、サン、ピエールが曰つて居る、外で働くに云ふ事は善い事であるが心は家庭に在らねばならぬ。吾々は交際と孤獨の内何れか一の爲に造られたのではない、兩方とも結構である、否寧ろ必要とでも云ひつ可きである、

せはしき此の世に静けきあの世に、

吾の好める花園はなし。

せはしき都のおどづれ響かん

葬りの音に嫁ぎの歌に、

茂れる木の葉の中に坐れば、

御寺の時計の虚音を聞かん、

園と森とのあはひの草地を、

濡はす静けき廣き流は、

ものうき橈にかき亂されて、

百合を動かし静に流れ、

やがて御寺の塔もて飾りし、

橋に荷たりの舟をばはこばん。(テニス)

天然の美は永久に楽しいものである、而し空に輝やく日光も自分の心が晴れやかでない限りは餘り楽しいものではない。

家族に對して吾々は執着と尊敬と愛の感情を持つて居る、それは文明の基礎であり源泉である、最も善良なものを實際に教へる學校は家庭であつて、それは高尚な感情や最高の性質に吾々を向上させるのである、天使とても人を幸福にさせる以上には何事も出来ないであらう。

汝等の家庭は賤しい、醜い、無趣味な又は冷くて不愉快であるかもしれない、而し其處には汝の取る可き場所、汝の爲す可き務があるのであつて、汝が困難を堪へ得ればそれだけ報を増すのである。

苦惱や邪曲を忍耐して辛棒するのは労働よりもつと困難事である、又それを爲す事は金銭、時間、或は労力を捧げるよりも大きい活きた犠牲である。

他人を不幸にさせたいと望む人は滅多に無い、又其人等は余が云つた事を恐らく讀まない人であらう、一體人を不幸にさせるのは心情が乏しい爲よりも思慮分別の乏しい爲にすることが多い、輝かしい微笑、親切な言葉と楽しい待遇で凡ての人に接しねばならぬ、吾々が可懐しく思ふ人々を愛するのみが本意ではない、吾々はこの愛を他の人々にも示さねばならないのである、吾々は智慧、分別、判断が乏しかつたが爲に吾々が一番愛せる者、又助けたいと望む人々を傷つける事が往々ある。吾々は激勵の僅かな言葉で百萬の力を得、非常に勇氣づけられた様に思ふ事は皆が熟知して居る處である。チエスターフィールド卿曰く「余が以前にしばしば考へ今も猶考へて居る事は、人が一

般に愛憎の外に何も知らないと云ふ事である、彼等は自分の愛する者を間違つた溺愛や無分別で、否寧ろ愛する者が犯した過失に對する偏頗から度々其人を害ふて居る、彼等が憎む場合は、時機に適して居ない激しい憤怒を起す時であつて、それが爲に他人をも自分をも害ふのである。

友人達と打交つて居ても吾々の生涯は屢々孤立に傾きがちである、「吾々はお互に異つた島に居て骨で仕切られた牢獄の中に、皮膚てふ帳りの後に閉じ込められて居るのである。(リヒテル)

吾々は友人や縁者を知つて居ると云ふが實際に其の人達をよく知つて居る者は僅少であらう、同じ家族の人々の中でも實際に孤立して居る事がしばしばある、彼等の心は並行線に副つて動いて居て決して合致しないのである、事實彼等は互に觸れようともしないのである。

吾にいと近き柔しき心すら、

笑となげきの理由を知らざるよ。(ケーブル)

吾々は天候、收穫、新聞の小説、政治の状態、知人の健康、缺點等眞の内的生活には何の關係もない何やかやを話題として論ずる事がある、實際些細な事程餘計に噂する様に思はれる、而して眞に多くの話題を持たない人が却て多く饒舌べるのである。人は會話が大きな技術であると云ふ事をよく理解しては居ない、眞に家族が一致してお互に同情をし合ふには、只情愛や好意のみが必要ではない、思想を表はし描き出す手練と力が必要なのである、もし人が汝に興味を持たせなければ汝が彼等に興味を持たせる様に努めねばならぬ。

自分の心に浮び來たつた事を其儘云ふのを誇とする人がある、實際人は信實であり又腹藏なく打明けねばならない、而して會話はこれと異つて居る様に思ふ、もし吾々が話しを面白く聞かせようとするならば或努力をせねばならぬ。

吾々は家庭を幸福にする方法として多くの事が出来るのである。

富と力と健康もて、

人を祝福せんことは、

吾のなし得る事ならず、

されども天は賜ひけり、

媚びへつらひに優りたる、

やさしく堅き愛をこそ。(ハナ、モリア)

人に過失を見出されても怒つてはならない、又自分が怒つて居る時には人の非を論らふ事をしないのが賢い仕方である、悪い性質の人は、他人がするよりもたしかに自分で自分を罰することが多いものである。即ち

人を絶えず苦しむる者には、

不興が唯一の快樂なれや。(ポーブ)

而して彼は常に不愉快であるから決して幸福を感じる事はないのである、斯の如き人は、無論他の人をも不幸にさせるのである、吾々の周圍に居る人々を幸福にするのに大した犠牲が必要なのではない、而しながら好意のみではまだ足りないのである、それには手練と研究と熟練とが必要である、善にもあれ悪にもあれ何事かを上手にし

上げたいと思ふには實行が必要である。
親切な同情深い態度は驚く程よく人々に感銘するものである、「行儀は人を造る」と云ふ古い諺があるが、其人の態度に由つて成功したり失敗したりする人が澤山あるのは事實である、總理大臣でさへも内閣を組織する時に其人の智慧、雄辯、才能、人格のみに重きを置かず、其人の態度にも多大の注意を拂ふのである、即ち人とよく折合ふ事の出来る態度に。

粗暴は勇氣ではなくして屢々虚弱の假面となる事がある、シエクスピヤーはマリークアントニーの口を借りてブルータスについてかう云つて居る。

彼の生涯は柔しかりき、

又自然が起立して、

「これこそ眞の男なり」と、

世界に斷言せし或ものが、

彼の心に宿れりき。

「音樂の調子にも時々調音と不調音とがある、これは實に深い意味、心の一致或は軋轢を語つて居る。」(マックスエル)

若何うしても過失を見出さねばならない時には、少くとも親切に語らねばならぬ、子供に對しては特に氣をつけねばならぬ、何故なれば兒童の小さい搖籃は、大人の心の、星で輝やける空よりも猶容易に暗くされるからである(ソヒテル)、ルーベンス(フランドル派の畫家)は繪筆の只一ト抹で子供の笑顔を泣き顔に變へる事が出来たといふ事を聞いた、人生に於て吾々はルーベンスの様に微笑を涙に變へる事が出来る、さうするには只一言でも十分である、多くの場合に

柔しく語れ、之は人の心の、

深き泉の只一滴よ、

されど幸と喜悅來り、

永久迄も語りつたへん。(ラングフォールド)

私なる處で非難をし公の席で賞讃すると云ふ事は善い定めである、私に云はれた事は

感謝の心を以て受けられ親切に思はれ、其上良い結果となるのである、而して公開の席で稱讚する事は其人に自己を内省させて其の報も貴いのである。

とりわけ必要な事はもし汝が人の過失を見出せばそれを眞面目に見て、遺憾の念を表はすのが善い、成る可く憤怒や迷惑の念を見せてはならぬ、アーカイタス（ギリシヤの數學者兼哲學者）が彼の奴隷に「もし私が怒つて居なかつたならば、私は必ずお前を罰したであらうに」と云つた、汝が怒つて居る時には語る前に少くとも一寸止めて云ひたい事を考へよ、マシユー、アーノルドが最高教育を受けた人の特徴として擧げて居るものは「無盡蔵の恩恵、事情の斟酌、人に對する情け深い判断に結びつけたる、行爲に對する嚴しい判断」である。

凡ての人の事情を斟酌せよ、もし汝が其人の凡ての事情を知つたらば非難も憐憫に變る事が屢々ある、他人に對して出来るだけ多くの尊敬を持ち、羨望せざる様に努力せよ。

死は萬人を同等にしてしまふ、然ればこれを豫想して紳士らしい態度を持して萬人に

接せよ。

もし出来るならば決して友を怒らせた儘別れたり、又冷淡な扱をした儘別れてはならぬ、如何なる別が最後になつて仕舞ふかもしれないと云ふ事を心に記せよ。

或人の言葉は太陽の光線の様であるし又或人の言葉はするどい逆刺の矢、又は蛇の毒牙の様である、もし果して激しい言葉がそれ程深く人の心に入るものならば親切な言葉は如何程深い喜を與へるであらうか。

善き言葉は廉價にして非常に價値があるとジョージ、ヘルバルトは云つて居る、それは、

當もなく番へし矢羽根は

思はぬ目的に當りぬらん、

當なく語りし言の葉は

病める心を癒さんか、將た害せんか。

而し話すと云ふ事が常に必要なものとも限らない、ペテロがキリストを知らじと否定んだ時に「主、ペテロを見給へり」と云ふ事を聞いた、非難をする様な悲しい容貌だ

けで、云はずとも十分意味が通じる、それでペテロは外へ出ていたく哭いたのであつた、容貌が鋭い苦痛を與へると云ふ事は眞實である、其のやうに親切な一瞥も喜悅を與へて、人の心を踊らす事も出来るのである、長い間別れて居ると吾々が受ける事が出来ると思つた温い觀迎が如何に慕はしいものであらうか、又吾々が毎朝逢ふ時の柔しい微笑ですら、陰氣な日を輝やかせる事が出来るのである。

愛する人達と俱にし在らば則ち足れり。(プルイエール)、餘り遠慮深くして汝の愛情を表はす事を恐れてはならぬ、もし汝が冷淡に見ゆるのならばまだ十分の愛ではない、温かい、柔しい、考へ深い、且つ愛情の深い人とならねばならぬ、人は義務よりも同情に由つて助力せられるものである、愛は金錢よりも優れたものであつて、柔しい言葉は贈物よりも人に喜びを與へる。

ベンジャミン、ウエストは彼が書家になつた動機は何かと問はれた時に彼は「それは吾が母の接吻であつた」と答へた、孔夫子曰「もし家庭の務が十分盡されてあればわざわざ遠くへ行きて生贄イタニエを捧げて神を奉る必要はない」と云つて居る。

「人生の最も高い又最も美はしい器」(シセロ)である汝の友を選ぶには非常な注意を拂はねばならない、ジョージ、ヘルバルトは善き友と交はれ、然れば「汝も善き人とならん」と云つて居る、又スペインの諺にも「汝が共に生活せる人を誰れなるか語れ、さすれば汝が如何なる人物であるかと云ふ事を語らん」と云ふのがある、自身に善い友達でない人は、又外の人にも善い友達となる事が出来ない。

よく選ばれたる友情は、最も貴き徳なるぞ、喜びも信も共に享け、吾等が苦しみ二つに分たん。(デンナム)

女の友達を賢く選ぶ事は非常に大切な事である、ソロモン王の時代より多くの賢者でありながらサイレンに破られた人が澤山ある。(ソロモンはイスラエルの王にして賢人の名あれ共晩年女色に溺れて身を亡ぼせしと傳ふ)。

大なれどもその心

美し妖女にあざむかれ

曲れる道に蹈入りぬ。(ミルトン)

リ、一が「友情は人生の寶玉である」と云つて居る、友達のない人は不憫であるが、己自らの過で招いたのは尙更である。

運命に呪はれし人もなし、

衰へ果てたる人もなし、

されど或者はえこそ知らね、

己が心に責を負ふなり。(ロングフェロー)

ケープルは、吾々が離れて單獨で居る事は必要な事ではないといふ悲愴な言葉を語つて居る。

悲しみと恐れの際れ家にある人に

吾等の隠者の精神は宿り、

明暗のある所に吾は目を注がん、

温き心より來りし色彩に。

而し時に孤獨になる事の出来る自由を持つ事は確に善いものである、そは、若し汝が

知人より離れる事が出来なければ彼を愛する事は出来ない、否困難であるからである。汝は不平の原因から免れる事は出来ないものであるから忍耐して道理を辨へよ、第三者の立場からそれを見よ、急いで事を爲す勿れ、自然は決して急いで事を爲ないのである、「急ぐ程遅くなる」と云ふ諺も昔からあるではないか、もし確定する事が出来なければ寐りて後にそれを解決せよ、グレーシアン曰く「枕は黙せる巫女であるから其上で眠つて決定した事は、眠らずして既に出來上つたものを考へるよりも、もつと結果が良好である」と、要するに決して急いで爲てはならない、熟考せよ、而して思慮する時には十分に時間を取れ、夜中思ひ餘つて居た事でも朝になると非常に異つて考へられる事が度々ある。

よしの確明敏でも、苟も傷害を與へるやうな手紙を書いたならば翌朝迄それを取遣して置き、さすれば終に出さなくなる事が屢々あるものである。善き友を造れ、然れど悪しき友は無きよりも害になるものである。

邪曲なる者の途に入ることなかれ、

悪者の路をあゆむことなかれ。

これを避よ、過ること勿れ

はなれて去れ。

そは彼等は、

悪を爲さざれば睡らず、

人を蹶かせざれば、

いねす。

不義のパンを食ひ、

暴虐の酒を飲めばなり。

義者の途は

旭光のごとし、

いよ／＼光輝をまして、

晝の正午にいたる。(箴言)

而し悪い人や無智な人を友とするのは大いなる間違であるとは云へ、その種の人々は非常に多いから敵とするのは愚である。

ラムが警句を云つて居る、「贈物を貰ふと今一所に居ない其人が可懐しくなる」と云ふのである、而し親切と忍耐と同情は更に／＼其の情を強めしめるであらう、友は汝が與へる事が出来る凡てのものを要求する事が出来る、而し彼等は汝に金を貸せと要求する権利はない、シエクスピヤー曰く

貸す人にも借りる人にもなる勿れ、

そは貸金は友をもそれをも失へば、

又借金は節儉の刃を鈍らせば。

又ソロモンが吾々に訓告して

他人のために保證をなす者は苦難をうけ、保證を嫌ふ者は平安なり。(箴言)

汝を多くの危険から守護し、多くの悲哀を防衛する者は友人である、オーガスタス王(ローマ第一の皇帝)が娘ジュリヤの爲に恥辱を受けた時「もしアグリッパかメーシナ

スカト生きて居ればこんな事が起らなかつたであらうに」と云はれた、(ジュリヤは數回結婚し遂に最後の夫タイベリアスに離婚せらる、操行修らす父の爲にバンドトリヤ、リーナムに流さる、アグリツバ、メーシナスは共に王の顧問官なり)。汝が良き友を得た時には離してはならない、

汝の得たる善き友を、

鋼の鉤ハガネカギもて心に止めよ。(シエクスピアー)

如何に輕き不平の原因をも友人に與へてはならない。

而して死が吾々より友を離して仕舞つても、再び相見ると云ふ樂しい希望があるものである、吾々は失ふた物を補充する事は出來ない、而し乍ら

年々に友を世より取られても、

天つ御國に吾等の希望が

増し行く事を思へば樂し。(ケーブル)

人生に於ける最も大切な段階は結婚である、愛は自然の萬物を美化し純化し去る、又

それは地上の毛虫をも天上の胡蝶と變へ、春には蝶の羽根を色どり、土螢の輝を増し小鳥の歌を喚び起し、詩人の吟腸を靈動さす、非情の自然でさへもその魅力を感じる様に思はれ花も美しい色に咲き出るのである。

サイマナディース(ギリシヤの抒情詩人)曰「人には善良なる妻よりも優りたる祝福はない、又惡しき妻よりも大なる呪はない」と云つて居る。

相争ふ婦オシナは雨ふる日に

絶えず落つる雨漏アマモリのごとし。(箴言)

賤が伏屋の片隅に往まはん方ぞよからまし、

假令玉樓なればとて、うるさき婦ヒト人と共なるよりは。(同)

妻の選擇に關して有益なる訓誡を與へると云ふ事は容易な事ではない、人々の考へは皆一様に極りきつて居るが餘り若くて結婚するのは善くない、ヘンリー、テイラー氏は若い男女が結婚する時に「それはお互に支柱となる様に植ゑる二つのスキートビーの様なものであると云つて居る、金錢を目的に結婚してはならない、が又金錢無しに

結婚しても不可ない、金銭を當に結婚する人々は「彼等が生涯中満足して幸福である事にのみ重きを置いて、自分が金銭よりも劣つて居ると云ふ事を證明して居るのである、斯の如き人々は自分の富を算へる如く悲哀をも思ふ時に、幸福なる人生を得んが爲に持てる富の全部を快よく擲つ事が出来るであらうか」。(ヂエレミー、テラー)

「自分に少しも厄介を掛けない優美で、單純で、派手で、柔順な心を持てる妻を娶つて只それを自分の生活の飾となし用の無い時は却けて置いて、淋しさに堪へられぬとか、むづかしい面倒な仕事が起つた時だけ傍に置きたい、こんな事を結婚に當つて想像してはならない、」斯の如きは夢想にして、若い快樂主義者の夢に過ぎない、とテラーはその「結婚の指輪」中に述べてゐる。彼又曰く「ホーマーは夫の務の性質に由つて多くの柔しい名目をつけて居る、曰く汝は妻に對して父たり、母たり、兄たる可きである、然らずんば結婚した妻の境遇は孤兒の有様よりも淋しい位置に居る事は確である、それは家庭にあつて父、母、兄に圍まれて居た妻は汝に來らんとて彼等を残して來たからである、されば妻は不運なる孤子の様に不幸になるか或は汝から父、母、兄

否それにも優つたものを見出す可きか、兩者の内の一とならねばならぬ」。

少くとも汝が是に就て疑を懐くならば早まつた結婚をしてはならない、結婚は幸福となるか非常に悲惨となるかの分岐點である、而しもし戀に落ちる事が大切とすれば戀を續けると云ふ事は更に大切である。

結婚は大なる責任であるから、お互に全然目にのみ頼つたり又それに眩惑されてはならない、即ち「結婚は手や目に由つて成立するのでなく只理性と愛とに由るものである」。(テラー)

善良なる妻は物質上のみならず精神上に於ても内助の功があるものである、シエクスピヤー曰く「卑しい人は戀を得て初めて、生れつき持てる素質にそれ以上の尊さを加へるのである」と云つた、卑しい人でさへも斯く立派な者になり得るならば況や既に尊む可き性質を持てる人に於てをや。そは

俗なる此の世に交じらざる人の、

一足毎に魅力は浮き上らん

全き望と愛とより。(ケーブル)

ジエレミー、テイラーが「結婚は神聖な式であり、清い契であり、又貴き職務であるそれは神聖な意味を含み、又尊む可き名稱にして然かも宗教的な業務である、又それは人との交際にも便益であるし、神の御前にも聖善なものである」と云つて居る。

トーチュリアン曰「もしも結婚が幸福とすれば、吾人は如何にすれば其幸福を表す言葉を見出し得るであらうか……彼等は共に祈り共に禮拜し共に食するのである、……又苦痛も逆境も愉快も共に分つのである、彼等はお互に隠す所もなければ、お互の重荷とも思はないのである、キリストはこれを見給ふた時喜び給ふて神の平和を下し給ふた、二人ある所には神常に居給ひ、神在ます所には悪は住まはないのである。

汝は結婚式の壯麗な美しい言葉に由つて汝の妻を娶るのである、即「善き日も悪き日も、富にも貧しきにも、病める時にも健全なる折にも、互に愛し勵ませよ、死の手が來りて汝等を離す迄共に睦じくせよ」と。

スタンレー曰く「幸福なる結婚は人生の新しい端緒であり、幸福と繁榮に向ふ新しい出発点である、それは愚劣、罪過等を我々の過去と共に永久に葬り去り、吾が目前に展開されたる將來に新しい希望と、新しい勇氣と、新しい力を持つて前進せんとする大機會である、幸福な家庭は天にある最も善きものと同じである、此の樂しき家庭では夫と妻、父と母、兄弟と姉妹、子と親が他人では出来ない、色々の異つた方法で正道に進む様に互に助け合ふのである、そは他の者は何人も家族の人等と同じ機會を持つては居ないし、各自の性質を辨へて居ないからである、家族の一員の幸福光榮に由つて家族の他の人々も幸福となり光榮を感じ、一人の不幸には吾々も不幸となり、一人の我儘、虚弱、煩惱に由つて吾々も恥辱を受け、一人の清純と、高尚と、精力に由つて吾々迄も高く向上し、遂には神の御許に迄も擧げられる様に感じられるのも、畢竟骨肉の關係があるからであつて他人の平安、名譽、恩恵、善良には何人も斯の如き興味を見出す事が出来ないのである。

最後に一言云ひ添へて置きたい、子供は實に多大であるが何れも喜ばしい負擔でない

ものはない、ジョージ、ヘルバートは「善良なる一人の母は百の教師に優る」と云つて居る、子供は此の世の中に送られた者と語られる事が屢々ある、而して怠惰な両親は若し「神が口を送り給ふならば、それを満す食物も送り給ふであらう」と云つて自分の無責任を許して居る、然れどマシユ、アーナルドは汝が正當に守る事の出来ない様な哀れな子供が、不安をも感せず相當な安樂を得るかもしれないとて、世の中に連れ來らす事は正しい事ではないと云つて居る。

子供等を愛の光の中で成育させようではないか、もしも子供時代が愛の心地のいゝ温さで祝福されて居たならば人生の冷淡をも又よく忍ぶ事が出来るであらう。

「自分の子供を真から愛する人に非ずんば、この可愛いらしい者と取り交はす美しい會話の快い調子が、如何に人の心を踊らすものであるかといふ事は語る事が出来ないのである、彼等の子供々々した様子、彼等の舌足りない言葉、小さな怒り、彼等の無邪氣、彼等の不完、彼等の要求は、自身及び共に交るのを喜ぶ人には云ひがたい喜悅と慰安の泉となるのである、而し自分の妻子を愛しない人は家庭に牝獅子を養ひ悲嘆の

巢をつくるのであつて如何なる祝福も彼を幸福にさせる事が出来ないのである、然れば自分の妻を愛する様に人に命じ給ふ神の誠は、喜びを樂しみ又それを受け入れる能力を人に養はせるに外ならないのである」(テレー)

第十三章 勤 勉

何事も空費して善いものは一もないが就中時間はその最たるものである。今日と云ふ日は只一度來つて決して再び來るものではない、時は天が與へる最も貴い賜物の中の一であつて一度失へば決して取り返すことが出來ないのである。

天ですら過ぎし日に對しては權威なし、

そは過去は過去にして我は吾が時をのみ有てばなり。

(ドライデン)

汝が後で非難を受ける様な方法で時間を浪費してはならない。世の中で「遅かりし」とか「あゝもあつたらば」と云ふ言葉よりも悲惨なものはない、時間は神より託せら

れたものであるから各瞬間毎に大責任のある事を思つて居なければならぬ、睡眠を節約し食事を節約し而して特に時間を節約せよ」

ネルソンは彼の生涯を通じて、凡ての成功は業を初めるのに十五分づゝ早くした事に依ると嘗て云つた事がある。

メルボン卿曰「青年には只此の一言の外に何にも聞かせてはならない、一言とは何ぞ、立獨行をせなければならぬ、而して汝が餓死するもせざるも只偏に汝の努力に係つて存するのである」と言つて居る。

加之、勤勉は成功するのに缺く可からざる要素であるのみではなく道徳的品性にも最も健全な感化を與へるのである。ジュレミー、テイラー曰く「決して怠けてはならない、もし餘暇があれば須らく眞面目な有益な務をなせ、欲望は精神が働かず肉體も寛ろいで居る時の心の虚に乗じて容易に忍び入るものである、即ち、安樂であり健康であり、怠惰である人は誘惑に打ち勝つことの出来ない人である、而し仕事の中で肉體の勞働程最も有益な又惡を追ひ拂ふのに一番力のあるものはない」と。

ケーブルの言に曰く「時と此世は、天と永久との用意であつて吾々が此の世で費した瞬間は、神が又來世に於てそのまゝ吾々の年として造り終ふのである。」

如何に小さき業であつてもそれが他人を幸福にさせ又善良にするのであれば、人を非常に喜ばせて其人の希望を最も高くに擧げることが出来るのである。

ビエトロ、メデチ(伊太利フロレンス公)が雪で肖像を造らせようとして嘗てミケランジェロを使用したと云ふ事であるがそれは貴重な時間を愚らしい目的に浪費したのであつた、而しミケランジェロが費した時間が世界に對して貴重であれば、吾々の時間は自分に對して更に貴いものであるのに、吾々は度々雪で像を造つたり更に悪い事には泥の偶像を造つて時を空費して居る。

ローマの大哲學者にして大政治家のセネカ曰く「吾々が時間の用途を理解する以上に時が與へられてあるのに時間が短いと云つて人々は咄いて居る、吾々の一生は何もしないで無意味に過すか、目的もなしに過すか、或は爲す可きこともせで過すべきかである、吾々は常に自分の日が短いと咄いて居乍ら恰も果なきものゝ如くに振舞つて居

る。

時を儉約したが爲に非常な利益を受けることは驚く可きである「ネヘミヤはペルシャ國王の御座の後に立つて待つて居る間に、神に心ゆくまで祈を捧げる時を見出すことが出来た」。

出来るだけ善良に又賢く自分の時を費さうではないか、吾々の中で最も幸福と認める人でさへも多くの事をなし終へず、多くの書籍を読み終へず、光景も見終へず、都會をも訪ひ得ずして逝かねばならないのである。

人生に於ける大なる成功と幸福の大要素は、正直な確實な働をなし得る能力であると云ふことが出来ると思ふ、シセロが、人生に於て第一に要するものは大膽、第二も大膽、第三も大膽であると云つた、自信は確に有益である、而し一にも忍耐、二にも忍耐、三にも忍耐と云ふ方が更に適切であるであらう、働は遊戯と同じく人生の目的ではない、兩者とも同じ目的に達する手段である、働は肉體の健康にも必要であると同様に心の平和にも缺く可からざるものである、快々として送る一日より、働いて過した一週

間の方がもつと疲労を感じないものである、煩悶は吾々の肉體の組織を壊してしまふが働はそれを健康に又安寧に保つものである、筋肉の運動は肉體を健康にし腦の運動は心の平和を持ち來らす、「人は頭の働に由つて心の安息を得る事が出来る」。

(チャンカート)

「同國人に對して親切であつたと云ふ感じを有ちつゝ、朝には活動力を得夕には疲労する眞の働を女子に與へよ、然らば彼女の根もない悲哀は晴れやかな慈愛深い平和の光に變つてしまふであらう」。(ラスキン)

汝がしたいと思ふことは何事に限らずせよ、「哲學者の石」を見出し(昔練金術者は金屬を黄金に變ずる一の物質があると信じてそれを發見せんとせり、其の假想の物質を「哲學者の石」と云ふ)又圓に、同じ面積の正方形を造る様なことでさへも何らかの結果を齎すものである。ジョンソン博士曰く「言葉は地の娘であるが、行は天の息子である」と、何事を爲すにも飽くまでやり通せ。而して全心を之に傾注せよ、汝の才能を發達させよ、而してそれを使つて更に發達させるか或は少しも使はずして無くする

かは只汝に依るのである、ヘゼカイヤについて「行ひ始めし……工は悉く心をつ
くして行ひて、これを成就たり」。(歴代史略上)と語られてゐる。天才の話に就ては到
底十分には語り盡せないが語り得る範圍に於て云へば、それは障碍を冒して撓まず勤
勉することである、優秀な天才を待てる或人が天才とは勤勉に外ならないと言つて居
る、ジョージ、エリオットの如き婦人ですらインスピレーションで小説を書くと言ふ
思想を笑つて居る、ドワイト總長はエール大學の學生等に「天才は努力をすることの
出来る力である」と常に云つて居た。

乞食をすることは要するに働く事よりもむづかしい事であつて全體から見てそんなに
仕甲斐のある事ではない、加之吾人は皆獨立せねばならないのである、フランクリン
が、立つて居る農夫は跪びいて居る紳士より高いと云つて居るが蓋し眞理である。

コベットは彼の名高い英文法の本に就いてかう語つて居る「余は一日に六片を拂ふ兵
卒の時分に文法を學んだ、余の寢臺の端或は守衛所の寢臺の端は余が勉強する時の腰
掛臺であつた、余の背囊は本箱、膝の上にある板ぎれは寫字臺であつた、そして此の仕

事は余の生涯中の一年もかゝらなかつた、余は蠟燭や燈油を買ふ金錢も持つて居なかつた、冬になると余は暖を取る火の外、燈火を點すことも殆ど出来なかつた、暖を取る火にしても只余の番が来た時のみであつたのである、余が墨や筆や紙に時偶費つた僅少の金錢をも軽く看做しては不可ない、其の金錢ですら嗚呼、余には大きい金額であつた、余は其の時も今の様に大きな男だつたし健康でもあつたので運動が激しく従つて食量も多かつた、市場にて使はなかつた金の總體は一人に一週間二片づゝであつた、余のよく記憶して居る一事がある、それもその筈である、それは金曜日であつた、余が必要品を買つた後に翌朝干鯉を買ふ豫備として半ペニーを工夫してそれを使はずに残して置いた、が夜になつて余が上着を脱いだ時堪へられない程空腹を覺えたその刹那余は大切な半片がないのに氣が付いた、余は惨じめなシートと毛布に顔を埋めて小供の様に聲を擧げて泣いたのであつた、余がこんな惨めな境遇の下にあつても何うにかかうにか勉強し終へたのであるが、働をしない爲に口實を造る青年が在る筈であらうかと反問したい。

コベットは金銭に乏しかつたが精力と忍耐とを持つて居た、ペーコン曰く「多くの人々は自分の富や力をよく了解して居ない様に思へる、彼等は富を買かぶつて居るが力については實際よりも少く見て居る、自恃と自制とは彼自身の水溜の水をのみ彼自身の美味しいパンを食し、眞面目に生活することを人に教へ、又其爲に働いたり、自分に與へられた天才を注意して利用することを人に教へるのである」。

善き骨折は

榮をもたらず

働く犬は

怠ける獅子に優る。

「自分がした働に報が來ても來なくても常に眞面目に働け、汝が注意して働けば否でも報が必ず來るのである、汝の働が立派なものであつても、野卑なものであつても、假令ば穀物を栽植する業でも、史詩を書くことでも、汝の意の滿つるまでそれを忠實

に行へば、心に愉快の報を得る外に具體的の報をも得るであらう、如何に度々失敗しても汝は畢竟勝利を得んが爲にこの世に生れ出たのである、忠實な努力の報は、それを忠實に成し果てたと言ふ事が既に報であると自然が人に語つて居る」。

(エマーソン)

サー、ウラーター、スコットの言に由れば大魔法使のマイカル、スコットは、彼の親しい悪魔を絶えず働かせて居ると自分が安全である、と云ふことを云つて居たさうである、それは吾々にも同様に應用されるのである、人の心から追ひ出された悪鬼は家が空虚であるのを見出した時には又戻つて來て自分よりも猶悪い悪鬼を七つも連れて來るのである。

怠惰は休息ではない、それは働くよりも疲勞するものである、ローマ人は「怠惰なれば眞の休息を楽しむ事は難しい」と云ふ諺を知つて居た、何も爲ずに居るのならば眞の休息を取ることが實際困難である。急いで何事をもしてはならない、自然は決して急いで居ない、急いでする事は直に終つて永續きしないものである、スイスの案内

人が若い登山者に最初に與へ、又屬々繰り返す注意は「そろ／＼と絶間なく歩いて、決して早く歩いても愚圖々々してもならない緩々登れば早く頂上に達する」と云ふのである、又どうしても時々には休息せねばならない、人に限らず強壯な牡牛でさへもさうする必要がある、一フヤーロング（一哩の八分の一、我百十一間三尺八寸五分餘）又は一耙路程の距離を働いた後で休息を與へることは善い事である、而し人生に於ける進歩の大秘訣は決して急がず又決して愚圖々々しない事である、東洋の諺に「性急は惡より來り忍耐は幸福の門を開く」と云ふのがある、汝の時を待つて居れば遂には汝の順番が來るものである。

急いですると時間が省けると思ふ人があるがそれは大間違である、敏速にすることは善い事であるが、急いでするよりも手落なくする方がもつと大切である。

仕事に關しても、不規則に又一時的に大急でした仕事と、ゆつくりと綿密に規則正しく急ぎもせず焦燥もせずにした仕事と比較すると、前者は後者よりも非常に疲勞を覺えらから眞の勞働である、急ぐ事は仕事を害ふばかりではなく又生涯をも害ふものである、

る、

ゲーテの金言に「急がず休まず働け」と云ふ句がある、而し英語の「休息」と云ふ言葉は彼の思想を正確に云ひ表はしては居ない。

急ぐなよ、思慮なき行爲は

心の迅速を害へば、

善を思ひ正しきを覺り

而して汝の力を知れよ、

急ぐなよ、年は償ふ事をせじ

汝が輕はづみの行爲を。

休むなよ、此の世は常に過ぎ逝けば、

汝の死ぬ迄働けよかし。

すぐれたるものは残りやせん

時を征服せん爲に、

物象滅び失せつるに
永遠に生くるぞ榮あれや

(ゲーテ)

身を入れて働けよ、而し急いではならない、あせつたり氣づかつたりしてもならぬ。フランシス・ガルトン氏がかう云つて居る「旅路を辿つて居る時にはそれを面白いと思つて、決して其終を一生懸命に期待してはならない、我が楽しい家へ歸るのを困難の終了と看做したり、不幸の避難所と思ふのでなく、残り惜しく思ひ又冒險的な楽しい生活の終結と考へる方が善い、斯くすれば危険も少くして知らぬ間に道も抄つて、汽車汽船等にもよく間に合ひ、其上汝が進み行くにつれて國々の特色をも學ぶ事が出来るし、急ぐ場合や不慮の災難で歸る様な場合には非常に有益であるであらう、斯の如く、幾日か経過してから汝が振り返つて見ると非常な長途を旅行して來たのに驚くであらう、もし汝が平均一日に只三哩を歩くとしても一年の終りには一千哩進んだ譯であつて實に價值のある探險である、兎と龜の童話は廣い未知の土地を旅する旅行者

の爲に殊更に作られたもの、様に思はれるのである」と、早起をせよ、而して筋肉と腦に適宜の運動を興へ食事を適度にし正當に眠むり物事に對してのんきに構へよ、余の云ふ通にすれば仕事も汝を害はないであらう、心配、刺激、短氣、と不安心は汝の仕事を成功させないで、終には汝を殺してしまふものである、又そうでなくても、兎に角病が襲つて來た時には汝をその犠牲に上げてしまふであらう、然れど汝がもし快活な平和な人生を送るならば、肉體に運動と新鮮な空氣が影響を及ぼすと同様に、精神にも智的努力と自由思想とが影響を及ぼすのであつて、それは汝の生命を短くしないで返つて長くするのであらう。

忍耐は人の生を輝やかす、

されどそをなし終るは

今の世に行はれざる自殺と等しく、

碑に記るされしますら男の

儲たる用なき物具の如し

(シエクスピアー)

忍耐は政治家の頭腦、勇士の劍、發明家の秘訣、學者の「オープン、シセミー」である、
 「オープン、シセミー」はアラビヤン夜話のアリババが山賊の巖窟の戸を開く時に用ひた魔
 法の合言葉であるから此處では宇宙の秘密を窺ふ時に邪魔物を拂ふ呪文の意味)、グイ
 クトリヤ皇后は歴史上で最も善い君主の一人である、何故であらうか、彼女は偉大な
 決斷と機智を持つて居た事は明かであるが彼女は如何なる労働も厭はなかつた、陛下
 の働き給ふた精神は、ジエームスン夫人の書いた「メモアズ」(言行録)に引用された
 モントイーグル卿に關する記事の中に表はれて居る、モントイーグル卿が、國事の爲に
 陛下に御迷惑をかけねばならなかつたのが返す々々も残念に思ふ處であると申し上げ
 たお答に、「朕に迷惑をかけること云ふ言葉を決して申してはならない、只如何にした
 らばそれが出来るであらうか、如何にせばそれを正しくなし得るかと言ふ言葉をのみ
 朕に語れ、さすれば朕に出来る事ならばそれを爲さん」との終はせた。
 人生に於て汝の義務或は事業が如何にむつかしくあらうとも出来るだけ忠實に爲さん

と努力せよ。

ウエリントン公が勝利を得たのは、公が偉大な將軍であるのは勿論であるが又公が善
 良なる實務家でもあるからである、彼は軍需品や兵站部の細い事に至る迄最も注意深
 く氣をつけて居た、彼の馬は十分に糧秣を食し、彼の軍隊は温い衣服強壯な深靴と善
 良なる食物とを十分に供給されて居た、

「汝其の業ツチに巧なる人を見るか、斯かる人は王の前に立たん」とソロモンが云つて居
 る、又聖ポーロも「怠らす務め心をあつくして主に仕へよ」と吾々に語つて居る。

勤勉は自分で報を來らすものである、コロンバスは印度に行く西の方の道を探して居
 る間にアメリカを發見した、又ゲーテが摘示して居る様にサウロは彼の父の驢馬を守
 つて居た間に王國を見出したのである。

フランクリンは「汝が爲す可き事を實行せんと決心せよ、而して汝が決心せし事を實
 行せよ」と云つて居る。

天才が時々勤勉の代りをする様に想像される事がある、吾々は、最初には散々怠けて

居て、後になつてから濡れ手拭で頭を包んで僅かの間大車輪になつて勉強して、しかも高い學位を取つた大學生を新聞雜誌で讀む事がある、それが爲に其人等は後で一夜漬の勉強の爲に懲々したのである。而しさう迄しても勉強せねばならなかつたのである、世の中には吾々が學校の成績から推して判斷しても、偉大な人で伶俐に由つて成功した人よりも勤勉に由つて成功した人の方が多いのである、ウエリントン、ナポレオン、又クライブ、スカット、シエリダン等は學校時代には鈍い生徒であつたと云はれて居る。

或人には實際他の人よりも天才が多く與へられてある、而し二人を人生の道に同時に出發させて見る、而して一人を、輝いた才能を持ては居るが不注意で怠惰で放縱であるとする、又他を比較的鈍くはあるが勤勉家で注意深くて高尚な主義を奉ずる人とするれば後者は遂には彼の立派な天才を持てる競争者を追ひ越して仕舞ふであらう、天才のない勤勉は、勤勉のない天才よりも成就する所が多いのである、人生に於ける利益も、伶俐も、富める友も、權力のある親戚等も、勤勉と人格の不足を償ふ事は出來

ないであらう。リンコーンの監督であり又大政治家でもあるグロステストは怠けもの、兄弟を持つて居た、其人が嘗て自分を偉大な人にさせて呉れと彼に願つた、監督が彼に答へて曰く「兄弟よ、もし汝の犁が毀れて居たならば余はそれを繕ふ金を與へるであらう、もし汝の牡牛が萬一死んだのだつたらば余は他の牡牛を買ひ與へるであらう、而し余は汝を偉大な人にする事は出來ぬ、余が最初汝に逢つた時汝は農夫であつた、而して余が死ぬ時にも汝は矢張農夫であらう」と言つた。

ミルトンは天才の人であつたのみならず又動かしがたい程の勤勉家であつた、彼は自分の習慣をかう説明して居る、「冬は屢々、労働に又禮拜に向はせる爲に人を起す何處の寺の鐘の音も響かぬ前に、又夏は、一番早く目醒める鳥と共に或はそれより余り遅るゝ事なく起き出で、良書を繙き、或は注意がまとまり又記憶が十分胸に浮び來る凡人に讀ませる、其後楽しい勇ましい労働をして、肉體の健康と勇氣を保持して精神の爲に、宗教の目的の爲に、又吾國の自由の爲に快活な楽しい而し鈍からぬ務を爲すのである」汝の仕事が無趣味なものと思ふ莫れ、汝が望むならばそれを面白くするこ

とが出来るのである、汝の全心をそれに傾注せよ、その意味を考へ、原因と前からの沿革とを尋ね、各方面よりそれを観察し、而して如何に卑しき労働でさへも人に齎らす利益の多い事を勘考せよ、斯の如く考ふると吾々の務の中に熱心に期待しない務は一もないのである、而して次第に自分の仕事を愛する様になるであらう、もし喜んで自分の仕事をなせば次にはそれを容易に爲し得るのである、よしんば最初之を不可能と思ひ或は之が苦役の如く見えても汝に必要なものかもしれない、又山中の空氣の如くそれは善いものであつて汝の人格を緊張させるかもしれない、吾々のスカンディナヴィアンの祖先等は槌を握れるソアの神を禮拜した、又昔の北國の方の神話にヴォーランドが世界中で一番すぐれた鍛冶屋になりたいが爲に自分の魂を惡魔に賣つたと云はれてある、而し之は昔の事である。

睡眠に必要な時間は何時間位であらうかと云ふ事は今大問題として考へられてある、がそれを決定するのは自然でなければならぬ、或人は他の人よりも多くを要求するであらう、余は自然が與へた量を減する事は不可能だと思ふ、又眞の睡眠を取つて居る

のは時間を空費して居ると云ふ事が出来ないのである、睡眠は都會に住んで居る人々の非常に消耗せる神経の精力を驚く程よく償ふものである、

サー・エドワード・コークが一日を分ちてこう云つて居る、

六時間を睡眠に六時間を研究に、

四時間を祈禱に―其餘を自然の享樂に。

サー・キリアム・ジョーンズは之を改め直して

研究に六時間、睡眠に七時間

十時間を世事に當て、凡てを天に當てる、

と云つて居る、六時間又は七時間の睡眠のみでは余には不十分である、吾々は意氣消沈するのでなく十分に勇氣づけられたと感せられる迄眠らねばならない。

吾々の思想を樂しませる職業が、悲しい時に吾々の大なる慰安となる事が屢々ある、
「人生の幸福は或ものを成就し、或るものを愛し、或るものを望むことである。世の中には暇があり過る爲に無益な恐怖と不必要な懸念とで獨り苦しむ者が吾々の仲間

も澤山ある、何にてもあれ絶わす仕事に従事せよ。

働に思想に汝は必ず見出さん

悲しみも與へ得ざる心の平和を。

(スターリング)

年老いたり、一が「賢者には何處も國であり、静けき心には何處も宮殿である」と云つて居る。

加之自然と共に働きてそれに逆ふ莫れ、成る可くならば逆流に向つて漕いではならぬ、もし止むを得なければ逆流にも棹さ、ねばならないが決して後すさりをしてはならぬ、もし吾々が自然にのみ一任したならば自然は吾々の爲にして呉れるであらう。宇宙の法則を破る者は他の凡ての法則を破つたのと同じ罪がある。そは其人は自然に超越して居る様に又自然の中にも居るからである、換言すれば全宇宙は其人に對して開戦するのであつて、無數の目に見えない力を以て、自然は彼の上に、又彼の後より來る子孫の上に何日とも知らず何處とも知らずに復讐をし様として居るのである、之

に反して心も精神も凡て自然の法則の道に従つて居る人は、彼の爲に善くあれと自然が皆一致して働くのを見出すであらう、而して彼は物質的の自然界と親しくなるのであつて同時に頭上は太陽に、足の下は柔かい土に由つて助けられ、又親しくなるのである、何故なれば彼は太陽と土と他の凡てを造りし神と、自然界に破る可からざる法則を與へ終ふた神の御意思イコノミとに、従ふからである。

第十四章 信 仰

統計に由ると世界の人口の十五億人の中、四億人は佛教信者で三億五千萬人はキリスト教信者で二億人は印度教信者で一億五千萬人はマホメット教信者である、而し假令セルデンが極端に之の反對をしても、「多くの人の奉ずる宗教は平安を得ると云ふ事に一致して居るが、猶よく吟味して見れば凡ての點に於て同一なる宗教を三つ見出す事は不可能である」と云ふ事實に注意して見ると、彼はこの事柄が眞實であると云ふ事を見出すのは勿論である、何故なれば吾々は此世界に關しても、實際は餘り多く知

つては居ない、まして他の事に關してはそれが善く造られてあるかと云ふ事すらも知事が出来ないのである。

キャノン・リットン曰く「吾々が現に生存して居る此の不可解な世界よりも、もつと尊い信仰の世界が吾々の目前に展開されようと言れまいと、この吾々の世界は尊い神秘の宮である、汝が明日の午後田舎に行つて見ると、此處彼處にふくらみ初めた蕾や新緑の若葉は、すでに春が汝の目前に迫つて來て其年々の誇である美しい光最を再び呈する様になつた事を思はせるであらう、それは汝に見る事も、觸れる事も定める事も、量る事も、了解する事も出来ない或不思議な力が存在し其の活働が四方八方にある事を示して居るのである、この力は語らず、騒がず、見えずして、しかも汝の頭上で擴がつて居る各枝毎に、汝の足の下に踏む草の葉毎に含まれて居て、生存して居るのである。

疑問は實に哲學の第一歩である、吾々は不可解の世界に住んで居る、吾々は一輪の花或は一疋の虫をさへ説明する事が出来ないのに何うして無窮を了解する事が出來得

るであらうか、マーティノー博士曰く「空間と静寂は確に神に屬して居るものである夜露が晝間の心勞の塵を抑へ、極微な不安もない幻が默想を一掃し、星輝やける無窮の空の下に沙漠の如く地が眠る時に、云ひ盡されぬ神の存在は吾々をしつかと包み、激しい夜風にも吾々を驚かさずして天の昔からの光で真ともに吾々の目を眺め給ふのである」と。

ジョン・スチュアート・ミル曰く「人間の生活は不可解事で取り卷かれてある、吾々の狭い經驗は果しなき海原の真中に浮ぶ小島の様であつて其廣大と朦朧とは吾々の感情を威嚇し吾々の想像を刺激するのである、不可解のみでなく、吾々が生活して居る此の地上の版圖は無限の場所にある一つの小島にして又無限の時間の僅かな時に過ぎない」

ホール監督が「デイ、ポーシテート、クレデンドラム」の書に「人が僅かなものをも信せねばならぬと云ふ事について」書いて居る。吾々が絶えず無智であり、又吾々が判断する事をも止めねばならないとしてもそれが爲に希望を失ふ必要はないのであ

る。

吾云はん、定かに分らねど末の日に、

曉か黄昏か、將、朝か夕べかに、

此の世でたくみし其系の

只一部にてありつれど

そを失はるゝ事あらずして、

大なる業をなごげん。

吾々が説明する事が出来なくとも吾々は感ずる事が出来る、これは神學にのみ限つては居ない、聖オーガスチン曰く「時とは何ぞと汝が余に尋ねても余は語る事が出来ない、又汝が余に問はなくてもそれをよく知つて居る」ウエスレーは自分をかう説明して居る。

言葉多き争に嫌きぬ

思想、形状、法式、名聲にも、

吾は神、道、眞理、生命を慕ふ、
神の愛は吾が純なる心を燃やす
純潔キヨキを學びて吾は飛ばなん

汝と汝がものと共に生き共に死なんため。

マーティノー曰く「神に關して餘り語り過ぎる人、又は恰も神の御主旨と御計畫を熟知せる如く語る人、綽々として何の組織の理由をもどの出来事のやさしい恵をも示し得る人、神の永久の組織の賢さを賞め、それを自分が討論するのに善いものとして保護する人、又輕快な調子と馴れ／＼しい快活な様子を持つて、嚴かな神意で自分を利用する人々は彼等の限りある確信で吾々を疑惑の盡きざる苦痛の中に落とし入れ遂に「余について何事をも聞くな余は只總てを汝に捧げん」と泣き呼ばせるより外に何もしないのである」。

デイン・スタンレーは彼の生涯の大事件は「長い年月の信仰と疑との間の軌跡を破つて吾々が救の來る山に目を注ぐ事である」と説明して居る。

ハーバート・スペンサー曰く「考へれば考へる程益々不可解になる神秘の中で、絶對に確實な一事がある、それは萬物の由つて以て進歩する事の出来る、限りのない永久の精力の前には常に人が在ると云ふ事である」。

故に吾々は定める事は出来ないから、感じるだけで満足せねばならない。

人を各派に別つものは多く徒黨であつて寧ろ宗教でない、聖ポーロの訓誡にも反して其時代の人々は「我はポウロ、我はアポロ」と云ひ張つて居る。

ジュレミー・テイラー曰く「神の國は言葉でなく力にある、即、神を敬ふの力である、今吾々が急に他の法式を初めたり、又凡ての宗教を信仰に變へるとしても吾々の信仰は興味或は争論の結果に外ならないのであつて、又其信仰は黨派に同意して居るのではあるが全世界に反して居るのである、どの宗教に彼は屬して居るか云ふ間は、彼はどの黨派に屬し其黨の主意は何であるかと云ふ意味にはなるが、彼の生活の態度は何であるかと云ふ意味ではない、もし人が自分の黨派と其の黨の利益に熱心であるとするれば假令彼等が墓の様に慾深く、デーサンの様に逆心があり、コーラの様に分離

し、悪魔の様に誇つて居ても其の黨に取つては貴い人である」。

信條と信仰とは全然異なる二つのものである。

吾が心よ、汝の欲するものを告げよ

信仰なるかはた信條なるか。

假令ソローが宗教上の科學よりも、科學上の宗教の方が多いと云つても科學者は信仰の乏しい事を攻激される事が屢々ある。

而し疑惑を持つて居る科學者は靈魂を嘲弄しないものである、テニソンが歌つた言葉に

信仰は亂れしも行は清し、

されば彼は音樂を奏しぬ、

正しき疑には多くの信仰あり、

然れば信經を読むよりも吾を信せよ。

この例に二人の代表的人物を引證して見よう、テインダル教授曰く「宇宙にある自然

界の組織又は人體組織等に表はれて居ると思ふ或る力を、余が他の人に興へようとする、その力は智的に取り扱はれるのを嫌つて余より迂り去つてしまふ、余は代名詞の「彼」(神)と云ふ字をそれに適用しようとはしない、又それを「良心」とも「源泉」とも呼ばない、其神秘は余を覆ふて居る」と、大思想家の一人であるハックスレー教授は又不可思議論者の一人であつて、普通の意味に於ける宗教的規制の味方ではないが彼は吾々に「社會の祝福となる既成教會の存在を余は認める、其教會では各週毎に神學上の無形的演題を繰返すばかりでなく人の心にある理想的な、眞實の、正しい、純い或ものに祈禱を捧げるのである、其處では日々の心勞の重荷で疲れたる者は僅かな休息を見出し、又少數ながらも會衆の全體の人々が、尊い生命を黙思して休息を得るのである、世の中で奮闘して居る人又は事務を取る人は此處で得る平和と慈愛に比して自分等が得ようと燥つて居るものゝ報が如何に些細であるかと云ふ事をも考へるのである、もしかゝる教會が建設されたならばそれに頼れ、何人もそれを崩す事が出来ないから」と云つて居る。

これはアーナルドやモーリス、キングスレー、スタンレーやジョエットの教會と餘り懸け離れて居ない様に思へる、英國の教會はだん／＼此の理想に近づきつゝある、而してさう成れば成るほど益々健實になるであらう。

神聖者は人々が了解し得る言葉で自己表現をしようと思ふ熱心に努力して居る、而し文字通りに彼等を受け得ると思ふのは彼等に對して氣の毒である、詩人が日の出を歌つても吾々は彼の無學な天文學的智識を咎めないものである、又太陽が動くのでなくして地球が動くのであると主張したとしても、誰もテニソンや又はシエクスピヤーを「神の名を汚す者」として咎める事は出来ないのである、科學上の發見にはそのものについての言葉が必要である、吾々が、新らしく出来た言葉を使はずしては小さな花や石をも正確に説明する事が出来ないならば、人間の言葉で無窮を理解する事は到底不可能であると感じるであらう、一般の説に由ると、或る場合に昔の著者が、惡の靈が働くと云つたのは確に神經の病疾があつたのであらうと云ふのである。

吾々が説明も了解も出来ないものを信ずると宣言するのが功ではない、又十分な證

據もない事實を信じたり吾々が理解しないものを信じると主張するのも決して功ではない、善い證據も無いと自覺して居るものを信する事は確に不可能である、それに反して吾々が十分な證據があると思ふものを信じたり、又吾々が正しい判断を持つて居ない時には自分の判断を止めたりするのが、吾々の義務である、或事實を絶対に信するか又は絶対にそれを信じないか兩者の内の、何れかの一でなければならぬと想像する人が多くある様に思へる、而かも大抵の場合吾々は信するにしても又信じないにしても十分な根據がない場合が多い。

眞の信仰は智的運動でない、信仰は勇氣を鼓吹するが、それは生きた信仰でなければならぬ、而して活動のない信仰は死んで居るのである、眞の信仰は不可思議な働をするものである、シャトーブリアン曰く「信仰は山をも移し、人の心にかゝれる重い分銅をも舉げる」と、セルデンは信仰と活動を、光と熱とに比較して居る、「假令余の智力で二つにそれを分ち得るとしてもそれは丁度蠟燭の様なものである、蠟燭には光と熱とがあつてそれを消せば二つ共皆無になつてしまふ」。

彼の有名なヘブライ書の十一章にも信仰に關して書かれてある、信仰に由つてアベルは祭物を獻げた、信仰に由つてノアは舟を設け、信仰に由つてアブラハムは彼の家を離れて行つた。何人も自分の信するものに十分の理由があるとして之に向つて何事をもなした。

惱多い、骨の折れる務に遭遇しても畏縮せず、反つて、自分が正しいと信する事を忠實にしたと云ふので自分を讃めて居る、而し吾々の或義務、決して容易ではない義務は、證據が不十分である時には吾々の判断を中止させるものである、徳ではないにしても疑が義務となる場合は往々ある。

吾が小さき體すら猶日を樂しめり、

然れど其日もやがては止みなん、

其は神のくだけたる光に過ぎず、

オ、主よ、汝はこれにも遙かに優れり。

(テニスン)

覆巾は少しづつ取れては行くが、數へつくせぬ問題に對しては吾々は今の所、不可解で満足して居らねばならぬ。

「人間としての吾々の幸福は、只僅かの智識をのみ得て満足する事である、其智識も重に吾々に關したものでなければならぬ、……吾々の凡ての喜びと激しく活動する事の出来る力とは夢想界で吾々が呼吸したり生存したり、又此處彼處に空想が開閉されるのを見たり薄い膜を通してそれを捉へて見たり、しつかりした又丈夫なものを瞥見して満足したりする事である、又時には隠されてある莊嚴を認めたり、強い光が吾々を照したり、或は無限の清純で疲れて居る處へ都合よく帳が廣がつたりするのを喜ぶ事でもある」(ラスキン)、其理由はハックスレー教授の言の如く「余がキリスト教の長所を挙げようとした事を回想する人は、何人でも人間の歴史上の要素として、キリスト教の信仰の大切な事を輕しめ無いのである、即、それは氣力と忍耐をもつた人間、人類の弱點に對する正義と愛憐、極端な犠牲に對する救助と、使徒や殉教者等が胸に書いて居た強い信仰、又はシーナのキャサリンやジョン、ナツクスのような隠れた男女

が、法王や帝王を讀責した勇氣、等を與へた信仰の道德的純潔と、尊貴を持てる人間の理想である」

使徒馬可が吾々に語つて居る。或る一人の學者がキリストの許に來て凡ての誠の内いづれが首なるやと聞いた、「イエス彼に答へけるはすべての誠の首は、イヌラエルよ聽け、主なる我儕の神は即ち一の主なり、なんぢ心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡し主なる汝の神を愛すべし是誠の首なり、第二も亦これに同じ己の如く爾の隣を愛すべし斯より大なる誠なし、學者イエスに曰けるは善いかな師よ、爾神は即ち一にして他に神なしと曰しは誠なり、また心を盡し智慧を盡し精神を盡し力を盡して之を愛し又おのれの如く隣を愛するは諸の燔祭と禮物よりも愈るなり、イエス彼が道理を知れる答を見て之に曰けるは爾神の國より遠からず」。

第十五章 希望

希望が、徳として信仰や愛と同じに並べられてあるのを、怪しむのを屢々耳にする、

信仰は了解されたり又誤解された、愛は明かに一の徳であるが扱希望は何であらうか？

と云つても棄てゝは宜しくない、棄てるのが不可なれば希望を持つ事は喜事である。目的に對する忍耐や不撓不屈は希望を含んで居る、而して忍耐は、高尚な勇氣のある、生一本な働よりも更に優つた人格の試金石である、神の爲に忠實な又堪へ忍ぶ事の出来る婦人こそ眞の殉教者である。

何事も餘り氣に懸けてはならない、人は落膽さへしなければ決して挫けるものではない。

少しも恥にはあらざるよ、

事に敗れ或はまた

大なる力に打たれしは。

そはつゆ人を害はず。

攻めもせず戦をもせで

敵に後を見せて逃れ、
襲撃オトリに逢ひて降服するは、
幸運ならであやまちぞかし。

(バットラー)

殆ど特性の様になつた、面白い常識を持てるシドニー・スミスは、もし吾々が世の中で價值のある事を爲たいと欲するならば、吾々は「岸の上で震へながら水の冷いのと危険を考へて立つて居てはならぬ、飛び込んで吾々の出来る限り良く泳がねばならぬ」と云ふ善い訓誡をした事があつた、人々が眞の危険を恐れないと云ふ事は不思議な事である、而も彼等は空想的なものに動される事が度々ある、例へて云へば人々に笑はれる事を非常に恐れるが如きである。不正な恥辱に敗けてはならぬ。

臆せる者は死を幾受も味へど

勇者は只一度味ふのみなり。

(シエークスピーア)

ドンキホーテが厩の窓から手でぶら下り乍ら地上迄達するのに恐ろしい程の距離があると想像したが、マリトーンズに助けられて下りて見れば地上より只つた五六寸だけの距離であつた。

天路歷程の中で不信と小膽を驚かした其獅子は、キリスト教徒が勇敢に其の方へ歩み寄つた時には鎖でつながれてあつたのである。

ペテロはパリサイ人にも兵隊にも勇敢に相對したが、祭司の長の庭に居た時婢僕等の嘲笑には堪へる事が出来なかつた。

戦争に勝つた軍隊が夜の間に恐慌を來して逃げたことも随分多い、「恐慌」と云ふ其字は原因のない恐怖の意味から來て居る、而して輝やいた晝間に起る恐怖や不安でさへも、屢々根據のない事があるではないか、

水泡の如く、消ゆるく惱は

忘れの川に注ぐなり、

吾等はそれを再び持たず、

又は柔しくみとりも爲さず
心の中にも永久に置かじ。
明日に消ゆるく其悲しみを
吾等は喜び逝かしめじ、
然れば悲しみまし加はりて
静かに／＼ひろがり行かん、
憂き悲しみの數をましつゝ。

(クラーク)

不満を感じる人は、彼が誰と取換つたらよいかと自問するが善い、彼は甲の健康も乙の富も丙の家庭をも己のものとする事は出来ない、もし彼が不満ならば全部取換へるか或は少しも變へずに置くか、何れかでなければならぬ。

コルリツヂが非常に困つた時にハンフリー・デヴィーにかう書き送つた、「この變化と、屈辱と恐怖の真中にも、永久と云ふ感じは吾が内に在る、余が堪へ忍んで居るも

のは皆祝福で満ちて居ると云ふ楽しい信仰が有る、而して其の信仰は決して人に征服され得ないのである」と、然れば決して絶望してはならない、絶望すれば煩悶すると云ふ昔からの諺がある、絶望を除く外、他の物は皆償はれるものである、シラクの子曰く「氣弱き者は禍なる哉」

勇氣去れば萬物去る、

あはれ生れざりせばよからまし」

(ゲーテ)

忍耐する事は吾々の運命に打ち勝つ事である。(キヤムベル)

望無き歩に心して

明日迄生きよ

暗き日は過ぎ去らん。(クーバー)

萬人は皆間違をして居る、度々云ひし如く決して間違をしない人は、何事をも成就し得ざる人である、而し吾々は同じ過失に二度陥る必要は無い。自分の失敗を學び、

それを善き生に一步々々近づく踏石とせねばならない。

ジョセフ・フュームは年收一萬磅の地所よりも快活な性質を持つ方が寧ろ望ましいとよく云つて居た。

活動するものには現在が必要である。而し過去にも未來にも生きると云ふ事は、一層賢い仕方であると考へられる、人生の幾多の不幸は現在の爲に未來を、瞬間の満足の爲に永久の幸福を犠牲に供する事である、不確な諺ではあるが掌中に持つて居る一羽の鳥は林の中に居る二羽の鳥に償すると云はれて居るが、僥倖にも林中の小鳥は籠の中に入らなくて済むかもしれない、而しこれに反して、未來が確に來るものならば「記憶を楽しみ天に大望を置ける人々こそ最も幸福なのである。(ラスキン)

吾々が未來に生きるならば何うしても悪い道に行く事は出來ないであらう、それは「人は、眞の生命と決して聯合する事の出來ない須臾の朽ち易き此世を捨て、未來で多くの祝福を持つて永久の生命を得様とするからである。」

余の特に言はんと欲する所は、人は男らしくて在らねばならぬ。

又た

爲さんとする意思、敢てする精神

(スコット)

を持たねばならぬといふ事である。

疑は吾が叛逆者にして、

躊躇爲す事を恐るゝが爲に

成すべき善を失はしむる事多し。

(シエクスピーア)

勇敢は一の徳のみでなく、人として缺く可からざる要素である、男子が男らしい者となるには大膽でなければならぬのは、丁度婦人が女らしい者となるには柔順でなければならぬのと同様である、而し勿論男も大膽であつて柔順でなければならぬし婦人も柔順であつて大膽でなければならぬ。

無鐵砲は勇敢ではない、勇敢は危険を冒す事をのみ含んでは居ない、其れに大膽に

向ふ事である、要もない冒険に走つたり、又それに反して、危険が迫つた時に憶病であるのは只危険を加へるのみである、危険に對して大膽に又冷靜を保つ事は安全を得る唯一の道である、戦争で敵から逃げる事は反つて殺される方法である、殊にアキリスの如き人々は只踵を傷つけられるばかりである、(アキリス幼少の頃、其母アキリスをステイツクス河に浸し其體を不仁身^{フジ}たらしめしかど其甲斐なく、後年アキリスは其時母の手にて扼せられ水に洗はれざりし所即ち踵に箭を受けて死せりと云ふ古語に基く)。パーク曰く「物事を非常に恐ろしく思はせるのは多く朦朧として居る爲である、吾々が危険の範圍を知つた時、それに目を慣らせる事が出来るは恐怖は消ね失せて了まふ」と、古の童話に鹿が羽根に驚いて狩人の手に落ちたとか、又羊の群が起した塵の立ち上るのを見た軍隊はそれを敵と思つて反つて伏兵の手に落ちたとか云ふ事がある。

冷靜にして勇敢なれ。

危険を^{イラダナ}尋麻の中より取り

安全を花より摘めり

と云ふ言葉がある、又東洋の諺にも「安全の着物に満足の足を包む」と云ふのがあ
る。

餘り期待し過ぎてはならない、「期待する事少くして、楽しむ事多きは成功の秘訣な
り」とゲーテが云つて居る、餘り多くを期待し過ぎてはならないし餘り早きを期待し
すぎても不可ない、「待てる者には凡てのものが来るのである」、人生の一番暗い影は人
が自分の幸を害ふ時に出来る影である、吾々が自分の本分を爲ても、猶悲は来るもの
であるから是を勇敢に堪えねばならぬ。

リヒテルが「汝の最暗黒な瞬間に、最輝やかしい記憶を回想せよ」と云つて居る。

苦しみて更に強くなるこそ

卓絶せる者と知れ。

加之吾々は常にかう云ふ事を知つて居るので慰安になる事がある、それは、

来るべきものは來れ、

荒らゝけき日を経て

時は早く過ぎ去れば。

(シエクスピーア)

そは、ジョージ・マクドナルドが云ひし如く

心正しく愛強ければ、

曲れる方に進まざらん、

咽ぶが如き雨も霧も

愛にて再び日光に變らん。

「冬の後には夏が來り、夜の後には日が來る、而して大暴風雨の後には静寂な日が來
るのである」、如何に吾が行く道が暗くとも時間は大なる悲しみを愈す事を思へ、「夜
の間悲しみを堪へ忍べば朝には喜悅が來るものである」。

心を静め、つぶやきを止めよ、

雲の後には日が輝けり、

汝の運命は世の常の運命なり、
誰が生涯か雨なからん、
暗く佗しき時なからん。

(ロングフェロー)

何か變化が起るとすれば最初不幸に見える、否少くとも確に不幸であらう、外見は屢々人を欺く、吾々は世の中に生存して居る以上些細な事で落膽はしない、吾々は試み初めてこそ物事が成就する、と云ふ事を知らないのである、困難と悲哀は屢々友達の假面を被つて居る、チルソンは退去の信號を見るのを欲しなかつたので彼の盲目の目でさへも利益に變へた事がある、エム・キー・グラント・ダフ氏がルナン(佛の言語學者且史家)の面白い傳記にかう云つて居る、「吾々は人が生きて居る間にはちつとも注意しないで、其人の死を羨むのである」と、又歴史上に於ても、其名が玉帛に垂れて永久に残る人もあれば、斷頭臺上の露と消れても猶其名が永久に朽ちない人もある、もし吾々が苦しむのならばそれは吾々自身の罪か、或は一般が善良なる爲か何れかである。

ある。

賢者は坐して己が過失を嘆かず

返りて其惡を拂はんと努む。

(シエクスピアー)

加之、吾々が人生の數限り無き祝福を喜び感謝すると共に、悲哀や苦難を純なる惡と看做してはならない、何人も絶えず變化なき成功を得る事は出来ないのである、些細な事柄ですら、哀へたり弱くなつたりするのである、困難に打ち勝ち、誘惑に反抗し悲哀をも勇敢に堪へ忍ぶ事は、即ち人格を高め強め且高尚にする事である。窮り無きものに目の當り相對せよ、然れば偉大なるものは堂々と其方に向つて進んで行くであらう。

吾々は夏の輝いた太陽の光線や、柔い空氣を非常に喜ぶが、自然はその雄大と美とを冬の雪と暴風雨とより受けて居る。
キングスレーは立派な短詩に北風の美質を歌つて居る。

あまき南のそよ風は

戀人等の嘆息にそよがしめよ、

ものうげなる若人が

婦人の秋波を受ける間に、

南の風は何をか爲す、

心を和ぐる其の外に。

灰色のすさまじき空のみ

吾が國人を強くぞする。

※ ※ ※

おどろくしきうしとらの

風は吹雪を横ざり來て、

英國人の勇猛心をそゝる

世界をめぐれる海の方へと、

いざ、來りて吾等の心に

海賊の血を湧き立たしめよ、

來りて頭も筋をも包め、

いざ、吹け、汝、風の神よ。

困難は道德の東北の風であつて吾々を鼓舞し吾等を抱擁するのである、

勇者の賞讃と冠こそは、

名譽の虚飾の上にあり、

然れども苦しき努力を缺けり、

勇士の心の榮ある勝利をも。(ヘンリー、テラー)

エビクタータス曰「ハーキュリス(怪力を有せしと稱するギリシヤの神雄)が、常に驅逐したり退治した獅子や九頭の怪物や牡鹿や野猪や或る邪惡な獸心の人が居なかつたならば、彼は何をしたであらうか、蒲團に包まつて寝むる事を望まなかつたであらうが、彼がもし奢侈と安逸とに彼の生涯を空費したならば彼はハーキュリスではない

又よしハーキユリスであるとしても彼は何う云ふ風に自分を利用したであらうか、又斯の如き境遇や場合が彼をして働かせなかつたならば、何う云ふ風に自分の腕と身體の他の部分の力を利用したであらうか」

ソクラテスが罪を宣告された時にアポロドラスはソクラテスがそれを受けたのを悲しんだ、哲學者の彼曰「汝も又吾に罪があると思ふのであるか」と反問した。

聖ペテロ曰「人もし受くべからざる苦難を受け神を敬ひて之を忍ばゞ嘉むべき事なり、爾曹もし過をなし撻れて之を忍ぶとも何の嘉むべき事ならん乎、されど若し善をなし苦められて之を忍ばゞ神に嘉稱を得べし」。

第十六章 慈 愛

吾々は、人が自分に善くして欲しいと思ふ如く吾々も他人に善く爲し、又人が吾々を親切に思つて呉れる様に吾々も人を心から思はねばならない、吾々が人を許さないで如何して人から許される事を豫期する事が出来るであらうか、一般に人を寛仁に解

釋するのは解せざるよりは正しい事であることを知る場合が多い。

或人は、丁度ハニバルがアルプスの峻を踏える時に錯酸を注いで道を造つたと云はれてある様に、人生の困難に錯酸を注ぎかけて通り脱ける事が出来ると思ふて居る。

又他の人は、常に犠牲を拂ふ用意はしても、人生に多くの光輝と幸福を如へる親切な又愛の深い、小さな行爲を等閑にして居る、親切な言葉善い行爲は常に失はれるものでは無い。

假令不平を云ふ様な理由があつたとしても、それは吾々が想像して居る程重大なものではない、而してそれを憤ると反つて悪くなるばかりである、復讐は毀損其の物よりも多の害を爲すものである、何人も絶えず他の人を害はんと思ふ人はない、もし斯う云ふ事を思へば反對に「蜂が怒つて人を刺せば自分で自分の命を失ふ」様に、自分に大害を加へるのである。

兀鷹は腐肉の外は何も嗅ぎ分けないと云ふ事を聞いた、又鼈は卵を生みつける前にも咬み、死んでからも咬むと云はれて居る。

斯の如く世の中には人の過失のみを見付けて居る人がある、而し賞める事は批評をするよりも遙に利口な遣方である、咎め立てをするのは實際眞の批評ではない、假令戸棚に骸骨があるとしても恐らく其處にあるのはそれだけでは無いかも知れない、骨だけでは人體を造ることが出来ないのである、同様に批評は眞であるがそれのみで眞理が全部云ひ盡されてあるだろうか、舞臺の後から芝居を見る事は面白いがそれは芝居を見るのに適當な場所ではない、人に於ても、人生に於ても、長所を見て短所を見ない様に努めよ、さすれば又汝が望む善を見出す事が出来るかも知れない。

常に忍耐強かれ、小兒が氣むづかしくなるのは十中の九迄は痛を覚えるからであると云ふ事を吾々はよく知つて居る、而して男も女も此點ばかりでなく他の點に於ても單に成熟した小兒に過ぎないのである。多くの場合もし吾々が凡ての事情を知り、人々が感じて居る事を知つたならば、不機嫌な人々と共に悲しみこそすれ怒る事は無いのである、然れば他の人を斟酌せよ、汝が如何程多く寛恕しても過ぎる事は決してないのである。

人が病氣である事を知ると、吾々は非常に忍耐深くなるものである、何物も惜しみなく彼に與へるし、思ひついた事を何でも爲る、又出来るだけ多くの迷惑や發憤をも恕するのである、而し何故斯かる時だけそう爲るのであうか、もし吾々が常に病氣の時の様に親切で、思ひ遣があれば何んなに善いかしれないのである。吾々は他人の不安、心配、悲しみの重荷、秘めたる苦難をも知つては居ない、然ればもし不平を云ふ理由があると思ふ時には、彼の輕からぬ苦しみを思つて斟酌せよ、許し過ぎはしないかと云ふ事を恐れる必要はない、何事にも又何人にも最善を盡せ。

「賞讃するに非ずば亡き人に關して何事をも語る莫れ」とは善い格言である、親切な言葉、善い行爲が一方に語られて居る間に、罵言、酷評を耳にする事が屢々あるが如何なる理由であらうか、もし人々が亡き人について賞讃する如く、生存して居る人をも賞讃するのならば何んなに美しいであらう。

若し何うしても責めねばならない以上は、決して火急にしてはならない。

審くなよ、人の頭の働も

心の中の働も汝の目には見えぬぞかし。
 汝がかすみし目には汚點たりとも、
 神の純き光には名譽の傷ぞ、
 勝利を得し戦場に受けしものぞ
 汝ならば目眩み屈すべき戦場の。

(ブロッカー)

不賛成を云ひ表はすのが必要な場合があるかもしれない、又そう云ふ折が確にあるであらう、而し普通に、若し親切な愛のこもつた言葉を云ふ事が出来ないならば一層何も言はずに沈黙を守つて居る方が善い、シドニース・ミスは、不在の時に彼を罵つた友人に、自分が不在の時には幾ら蹴らうとも御隨意だと云ふ傳言をしたそうである、而し吾々共の中には云はれる位ならば目前で小言を云はれるのを喜ぶ人がある、其人等は、辯護する事が出来ないから蔭口を特別氣にかけるのである、人々は、汝が他の人の悪口を云つて居るのを聞くと面白がつて笑つて居るが、次はきつと自分が笑

はれる番だと云ふ断定を下すのは當然であらう、然れば一寸の間は汝と面白そうに笑ふかもしれないが、漸次敬遠主義を取る様になるであらう。

汝が兄弟をやさしくいさめ

汝が姉妹には猶柔しかれ、

假令彼等が悪に行きても

柔しくなすこそ人の道なれ。

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

※

評する時に沈黙を守れ、

そは、吾、公平を保ち得ざれば、

行はれし事は、はかり得れど

反せし事は知らざれば。

(パース)

余は獸類の爲に一言云はねばならない、「魚鉤、係蹄、畏、狩犬（又現今ならば鐵砲をも加へねばならぬが）等を持てる人は常に獸類と戦争をして居る者である」とセキカが適切に陳べた、吾々の生存上他の動物を犠牲にせねばならないのは勿論である、斯の如く吾々は動物に負ふ所が多いのであるから、無益な殺生は避けねばならぬ、

吾が快樂吾が誇りに

卑しき有情の悲をな交へそ。

（ラーゾース）

されば「若し汝の心が正しければ凡ての動物は汝に對して人生の鏡となり、貴い教への本ともなるのである」（トーマス・ア・ケンビ）

現今吾々の多くは、動物が精神を持つて居る事を信じないのである、而し多分、釋迦の時よりウエスレーやキングスレーの時代迄大部分の人間は、持つて居たと信じて居た。

實際小鳥は特に精神的な或ものを持つて居る、確に靈的な人であつた聖フランシス

は、何にせよ小鳥も彼と同様に靈的なものであつて彼の如く朽ちる可き肉體に包まれてあると云ふ事を堅く信じて居た、然れば（彼が昔風に想像した如く）天にあつて天使がすると同様に、森林の中で神を讚美した美しい、不可思議な動物には、人間が愛する者に溺れる様な墮落は見られなかつた。

而しそれは如何でも、確に獸類を親切と尊重をもて取り扱はねばならない、無益な苦痛を與へる事は罪である。

ウオーズウオーズ歌へらく

善き人の生涯のいとよき部分は

親切と愛の

小さき、目に立たざる行爲ぞかし。

又コルリツヂが眞に善い句を歌つて居る、

人も鳥も獸をも

善く愛する者は善く祈るなり。

小さきものも大なるものも
いとよく愛する者はいとよく祈る。
そは吾等を愛し給ふ神は
萬づを造りそを愛し給ふ。

シエクスピアが立派な詩句の中でも、我々に語つて居る次の句ほど莊嚴なるはない。

仁慈は強ひらるゝものならじ、
和やかなる小雨の如く地の上に降りそゞぎ、
與ふる者をも受くる者をも祝福す。
これこそ力の中の力にして
王冠よりも王者にふさはし、
王の笏は一時的の權を示し、

威風はさはれ恐怖を含む。
仁慈は王の笏に優り、
心に王者の心を宿さしむ、
またこの仁慈は神に屬せり
仁慈が正義に適ふ時
此の世の力も神の御力。

慈善と云ふ言葉は施與と云ふ字と同意義に考へられることが始終ある、名高いギリシヤの詩句の

知らざる者も貧しき者も共にゼウスより來りしぞ、
如何に小さきほどこしすらも、人に與ふる恵は美はし。

と云ふ言葉は眞實である、(ゼウスはギリシヤ神話の諸の神の王なり)

而しながら施與は慈愛の一種類であつて決して慈愛の全部ではない、又よく考へて爲ないと折角の施與も益する所が少なく、反つて害になる事があるかもしれない、否

害になることが屢々ある。

慈愛に一番大切なものは深い同情と愛情である。

他人の悲しみを知らしめよ、

他人の誤を見しめざれ。

吾は他人に恵を示せり

されば吾にも示してよ。

(ボープ)

他人から蒙つた毀損を忘れよ、而し受けた恩を決して忘れてはならない。

恩知らぬ子を持つ事は

蛇の齒よりも恐ろしや。

(シエクスピーア)

「太陽の光を受ける価値のない者が澤山あるのに、太陽は朝々東の空より上つて、輝やかなしい光を萬人に等しく投げて居るではないか」(セネカ)

自分が他人を許さな

いのに、其人等に自分が許して貰へるであらうと云ふ事を期待する事は出来ないのである。

汝が、近づきつゝある死の恐怖を抱き居るとせんか、即、世の人々に對する汝の行爲に就て説明せんとする最後の神の審判に、纏ふものもなく、隠すものもなく赤裸々で出でんとする時を想像せよ、其時に審判の恐怖を一層増すものは、汝が此の世にありし時執念深かつた事、汝を害ふた人々に對して恵をかけなかつたといふ反省の外に何があらうか、汝が他人を寛恕せずして、而も其人が自分の爲に今、盡力して呉れる事が汝の唯一の希望なのであるか、この自然的に起る恐懼は救世主の譬を應用すれば猶明白に認められるのである、「若おのゝ其心より兄弟を救さずば我が天の父も亦なんぢらに此の如く行給ふべし」。

他の教理には説いてないが他人の罪を許し、吾々の敵を愛すると云ふ尊い教を奉じて居るのは特にキリスト教信徒だけである、聖書は之を幾度も繰返し々々勸めて居る「爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢらを免し給はん、然れども

もし人の罪を許さずば爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。(馬太傳)

否、罪を許すだけでは十分でない、吾々は是れよりも優れた事をせねばならぬ。

「然ども我なんちらに告げん、爾曹の敵を愛み爾曹を誣ふ者を祝し爾曹を憎む者を善視し、虐待迫害ものゝ爲めに祈禱せよ、如此するは天に在ます爾曹の父の子とならん爲なり、夫天の父は其日を善者にも悪者にも照し雨を義き者にも義からざる者にも降らせ給へり。(馬太傳)聖ポーロ曰く、

愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり

愛は妬まず

愛は誇らず、驕傲らず、

非禮を行はず、

己の利を求めず、

軽々しく怒らず、

人の惡を念はず

不義を喜ばず、眞理を喜び、

凡る事包容、おほよる事信じ、

凡る事望み、凡る事忍ぶなり、

愛は永久も墮る事なし然ど預言は廢り、方言は息み、知識も亦廢らん………これ信仰と望と愛と此三つの者は常に在るなり此うち尤も大なるものは愛なり」。

第十七章 人格

單に、世の中で成功すると云ふ問題から云つても、人格と確固とは恰恠よりも人々に多くの利益を興へるのである、勿論余は、人格の大切なる事をこれらの諸點にのみ置かうとはしないのである、而し少くともそれは事實たる事を免かれがたいのである正義を知つて居るばかりで行はないよりも、それを實行する方がもつと肝要である、然れば吾々が善良になりたいと願つたり、或は榮わたり幸福になりたいと願ふならば何れにしても吾々は全く其の道に従はねばならない、善き行爲は善き生涯をつくるも

のである。

人の一生涯の價値は其の道徳的價値で判斷されるのである。「良心が汝に爲ねばならない事を語つた時には、決して愚圖々々したり、躊躇したりしまいと一度決心したならば、汝は罪人でさへも希望する事の出来る凡ての祝福のしかもろれを得る健さへも得たと同様である。」(ケーブル)

汝が義務を怠つたり或は避けたりすると、終に至つて汝の幸福を増し加へる事は決してないのである、

男らしからざる恐もて相談^{ハカリゴト}をせじ、

義務の命する所は躊躇なく進み、

幾多の危険にも男らしく向ひ、

神に頼りてそれを凌駕す (ウラーツァース)

るは善良なる人の特徴であり又賢者の特徴である、

人生に於て眞の成功を得るには何が必要であるか、「唯一つ缺く可からざるものがあ

る、金銭でも無い、權力でも無い、怜悯でも無い、名譽でも無い、自由でも無い、健康さへ唯一のもので無く、それは只人格のみである、即ち十分に修養を積んだ意思、それのみが只吾々を眞に救ふ事が出来るのである、もし吾々がこの意味で救はれなかつたならば吾々は確に地獄に落ちねばならないのである。」(ブラツキー)

汝の人格は自分の意の通りになるのである、吾々は皆が皆迄詩人や音楽家や偉大な藝術家や科學者になれるものではない、「余はこの爲に生れて來たのであると云ふ事の出来ないものが外に澤山ある、されど汝の力の能くする性質、即ち、誠意、嚴肅、勤勉、質素、仁慈、淡泊、儉約、應揚、豪俠の性質は之を示さねばならない、如何に多くの性質を汝が容易く示す事が出来るか云ふ事を知らないのであるか、其性質に就て、汝は生れつき無能で不適當であると云ふ口實を設ける事は出来ないのに、それでも自ら進んでコンマ以下にあつて満足するのであるか、或は自分が生得足りない者として、強ひて不平を云つたり、卑しくなつたり、媚びへつらつたり、自分の貧弱な身體に缺點を見付けたり、人にお世辭を云つたり、邊幅を飾つたり、しづ心なくしたりするの

であるか、否、弓矢入幡さうではあるまい、而し汝は遠の昔に此の如きものより救はれたのであつた、只實際に、汝の理解力が鈍くあつた爲に責められるのならば、怠らす之に向つて努力せねばならないし、又自分の魯鈍を自ら誇示する様な事をしてはならぬ」。

(マーカス・オーレリウス)

汝が後に至つて恥づる様な事を決して爲てはならない、汝に取つて最も大切な善い批評がある、それは即ち、自分が自分に與へる批評である、セネカ曰く「患なき良心は斷わざる宴なり」と。

吾々に多くの善い教訓を與へて居るフランクリンの立てた計畫に、余が推舉する事の出来ないものが一つある、人の美德に關して簡單明瞭な摘要をした後で彼が「余の考は之等の美德を皆習慣的に修めたいと云ふのである、而しこの美德の全部に一時に心を傾注し盡して、余の注意を擾すのでなく、此の内の一つに意を注いでそれを修得するのが善いと思ふ、而して一つを終へたらば次に進む様に順々に爲たならば遂には十三の美德(節制、沈黙、秩序、果斷、質素、勤勉、誠意、正義、中庸、清潔、寧靜

純潔、及び謙遜)を修める事が出来るであらう」と云つた、この定理に基いて行ふ事は實際困難事の様に見えるのである、何故なれば「もし汝が悪魔の眷族の一人を家庭に入れるならば、他の眷族共もこれに従つて來るであらう」。

ウイルソン監督曰く「或人が貧しい一少年に金錢を與へて、酒屋へ行つて其金錢で酒を買ひ、賭博をなし、自分の娛樂の爲にくだらない玩具を買へど、命じたと云ふ事を聞いたならば吾々は如何に驚くことであらう、然るに汝は人に笑はれると云ふ事を自分で認めて居ながら、何故さう云ふ事を自分が爲ねばならないのであらうか」。

天を見上げよ、されど下を見てはならない、ビーコンスフィールド卿曰く「天を見上げない人は下を見るであらう、而して空を翱翔するのを恐れる靈魂は、恐らく地上を匍匐する様に運命づけられて居るのである」。

名譽は空なる名に過ぎじと

ア、誰が軽々しく云ひなせしぞ、

されど勇を奮ひ心を温むる

魅力を持てり其言葉は、

偉大なる死を思ひつゝ

椅子より跳び立つ若人が

両手を高くさしのべて、

男々しく行んと誓ふ如。

(チヨアナ・ベイラー)

生存の實在について考へると、普通の名譽心は全く注目する價值も無い様に思はれて、吾々が偉大な人とする人々、例之ばシエクスピヤーやミルトンやダーウインは、政府の拂ひ得る尊敬や稱號には毫も負ふ所がない様に思はれるのである、普通の名譽心に伴ふ一大障碍物は常に不満足を感じる事である、山に登る時に吾々が一の山の頂に達すると又他の峯が目の前に見ゆる、又例へて云へば、アレキサンダーやナポレオンの様な大勝利者は決して満足する所がなく絶えず不満を感じて居る、誤まれる名譽心の贊となつた彼等は、「安んじて感謝する」事は決してないのである、ベーコン曰く

「常に前進して居た人が阻碍物で遮ぎられて進めなくなると、自分で自分が嫌になつて以前の彼でなくなつてしまふのである」と。
而し

赫々たる人生の賑はしき一時間は

名聲も無き一世記にまさる

と詩人が云つたのは少し誇張に過ぎる。

身勝手な名譽心は鬼火の様なものであり。人を瞞着する怪光である。

そは勝れたる瞞にして

才ある少年の室を求め

窓をかくげて中に入る。

狭き壁は押擴がり、

王宮の如く廣やかになり、

屋根は高く空を摩し、

見えざる指が紋じらしの天井を走りて
赫々たる字もて彼の名を書く。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

其の報は何ぞや、只名聲なり、

賞讃——を得んには耳も遠くなり、

金錢——の爲にはそれを喜ぶ五官は死に、

花冠——の爲にはすでに白髪となれり、

名譽——を得んには鼓動せし胸も知覺を失へり、

されど只愛、そのみを求む。

其後には直に死が来るなり

用なき賜を我ものと

認むる前に死は迫り、

裸となして墓に送るなり。

(キリス)

吾々を分類する事が出来るものは何であるか、フランスの女王、フランスの攝政者
フランス國王の母君、スペインの皇后、イギリスの皇后にして又サヴォイの公爵夫人
であるマリー・ド・メデシスは、彼女の王子等に捨てられて、王子の國にも受け入れられ
ず十年間の虐待の後殆ど飢餓で不幸にもコロンで崩去された。どの王冠も多少は棘の
冠冕である、それを冠る者が善良で正しければそれだけ、自分の権力の責任は重く肩
に懸るのである、間違つた判断をして幾千人の人に不幸をもたらす時には、不安を感
せずには居られないのである。

如何に遅々たる進歩でも、そのある人生は楽しく、そのない人生は殆ど堪へら
れないものである事は實際である、それは

樂しき希望を萬人が求むる時、

音樂、詩、或は自然がもたらす

高きに擧ぐる救を得べし。

(トゥレンチ)

人と云ふものは發達する爲に造られた者であつて立止つて居るものではない、兎に角吾々の多くは靜止して居る事が出来ないのである、吾々は前進するか或は死んで仕舞はねばならぬ、而し望を抱くにしても吾々は目的には勿論、手段にも十分の注意を拂はねばならない、外見は向上する様に見えても、若し其の方法が不正ならば實際は墮落して居るのである。

然らば如何にして吾々の性質にあるこの二つの要求を調和する事が出来るのであるか、吾々の名譽心に由つて自我を各人の眞の王國となすのである、又眞の進歩發達は多くの善いものを知り、優れたるものと成り勝れたるものをなす事、換言すれば智識を富ませ、人格を高め活動をする事である、斯の如くに進歩し行けば決して阻碍物で遮られる事もないのであつて、各一步毎に安全となり毫も危険を感じないのである、人が持ち得る第一の又最高の名譽心は自分の義務をなす事である。

詩の華美も彼を高めず、

形式も彼を縛せじ、

友も彼を褒めざらん、

敵も彼を告訴せじ、

一たび彼の死する時

莊嚴も失せ美もあせて

己が務を善く爲せし

正直のみぞ残るなる。

(クレイク夫人)

ウエリントン公は公文に一度も「榮譽」と云ふ言葉を使はれなかつた、實に「本務」と云ふ言葉は彼の一生涯中の座右銘であつたのである。

野心を抱かず聖哲者のその如く爲せ。

多くの勇者も只一人の

聖者に等しきものなるを、

益なき歴史の頁を指さし

虚榮はいとよく人に教ふ
名譽を求むる正しき道を。

(パイロン)

今より百年も経過した後、汝が富める者なりしか或は貧しかつたか、貴族であつたか農夫であつたかと云ふ様な事は如何なる相違を齎らすものであるか、又汝が正義を守つたか不正であつたかとか云ふ様な事は何の相違も區別も齎らさないであらうか。ラスキン曰く「吾々が考へた事、知つて居る事、信じて居る事は結局取るに足りないものであるが、只一つ緊要な事は何を吾々が爲したかと云ふ事である。」

然しながら智慧は何處より覚めん

明哲の在る所は何處ぞや

人その價を知ず、

人のすめる地に獲べからず。

淵は言ふ、我の内に在らずと、

海は言ふ、我と偕ならずと

精金も之に換るに足ず、

銀も秤りてその價となすを得ず。

珊瑚も水晶も論にたらず

智慧を得るは眞珠を得るに勝る。

主を畏るゝは是智慧なり、

惡を離るゝは明哲なり。

(約百記)

正しく又信實なれ、ジエーン・ポール・リヒテル曰く「地上に於ける最初の罪惡は——幸にも惡魔が智識の木で罪を犯したのであるが——虚言であつた、正直は正しい政略であると同様に又最も善い政略である。」

いつはりの權衡はエホバに惡まれ

義しき砒碼は彼に欣ばる。(箴言)

チョーサー曰く「誠實とは人間が持つ事の出来るもの、中で一番貴いものである」
と。クラレンドンがフォークランド(英國の政治家)について、彼は「誠を非常に欽仰
せる者であるから、伴はる事は盗む事よりも苦痛に思はれるのである」と陳べた。

「眞實から遠ざかつて仕舞ふと最初に神を輕んじ、次に人を恐れる様になるのである
」。 (ブルターク) 自分が不正な行爲をしたのならば恥づべきであるがそれを白狀するの
を恥ぢてはならない。

人を造り、又其人が此の世で爲す可き天職として相應しい性質のものが數多ある、
而し其骨子とも言ふ可き性質が只一ある、それを持つて居ない人は人ではない、それ
が無ければ實際立派な生活も出来ないし、それが缺けて居れば大事業も成就する事が
出来ない、それとは即ち誠實——人の心の奥に潜んで居る誠實である、偉大な善良な
人を注視せよ、何故吾々が其人等を偉大な又善良な人と云ふのであるか、そは彼等に

は自分をも伴らない勇氣があり、又彼等の執るべき道を執る勇氣があるからである。

(マックス、ミュラー)

何よりもまづ己れを眞ある者となせ、

夜が日に從ふ如く誠實に從へ

人を伴はる事なかれ。

(シエクスピアー)

ラーヅマス曰く「矛盾して居る様に見えても相伴はねばならない二つのものがあ
る、即ち男らしい隷屬と男らしい獨立、或は男らしい信賴と男らしい自信とである」、
服従する事を學べ、然らば命令す可き方法を知るであらう、軍隊訓練は精神にも肉體
上にも善い鍛練である、然れど惡卒は決して良將には成り得ないのである。

汝業成りても誇る事莫れ

誇は破滅を來たし

高ぶれる心は沈淪を來たす。

(箴言)

吾々は感情と活動とを混交し、忍耐と不活動とを同一視する事が往々ある、而し之は非常な誤解である、忍耐は勇氣を要するのに感情は柔弱と克己の足りない證據である、年月の経るにつれて感情は益々弱くなるものであるが習慣は反つて強くなるのである。

怒りつぼくなつたり、善からぬ事を考へるのは汝の心に悪魔が巢を造つて居るのである、而してそれは間もなく暴君の權を振舞つて汝の持てる平和、幸福、を掠奪し、其代りに嫉妬、不安、恐怖を伴へる羨み、憎みや無慈悲等で満たし揚句の果には肉體も精神をも共々滅ぼしてしまふ様になるのである。

汝が人の上に立つ様な位置に置かれたならば努めて正しく又懇切にせねばならぬ、東洋の諺に「善き主婦が一言云へば召使は急いで飛び來り、善き主婦が指圖すれば事直に成就する、そは愛の律オキテ其人々の心にありて主婦の親切が奴僕オキテの足に翼を添へるのである」と云ふのがある、サデイペルシヤ(斯波の大詩人)がかう云ふ事を語つて居る、昔、東

洋の君主が嘗て或無辜の人を死刑に處す様にと云ふ命令を下した事があつた、其時に彼が「オ、國王よ、臣が命を救ひ給へと云ふに非ず君の御身を救はせ給へ、臣が苦しむは只一瞬なれど、無辜の者を殺したと云ふ良心の苛責は永久に國王の御身を惱まし奉るであらう」と云つた、と。

權力は常に責任をも共に齎すものである、如何なる場合でも爲たいと欲する事を考へないで、爲なければならぬ事を思はねばならない、幸福に進む唯一の眞の路は只これである。二つの義務の中何れを選むべきか疑はしい時に一番手近なものから取るのが善い、自分の家族をも顧みずして、異教徒の爲に盡して居る立派な人々も世の中にはある、而し同情も慈愛と同様に家庭から始まらねばならぬ。

この世界にある萬物は皆正義を助ける爲に造られたものである、之は容易に理解されるであらう、吾々は犯した罪の懲罰と云ふ事に就て間々語る事がある、誰が吾々を罰するのであらうか、吾々を罰する者は實に自分である、世の中は善行に喜悅を齎し惡に悲嘆を持ち來らす様に定められてある、罪を犯して其の罰にも苦しまないと云ふ

事は自然の法則に反するのみならず、それに妨害を加へる様なものである。

罪の免赦ユルシと云ふのは吾々が罰を受けないと云ふ意味ではない、さういふ事は不可能な事のみでなく恐らく不幸な事であらう、實際悪を行つて榮えると云ふ事よりも大なる不幸はないのである、もし汝が不正な事をしたのであつたならば汝の過去の追憶は未來に於ても、猶汝を苦しめるであらう、汝に傷つけられた人は汝を許すかもしれない、而し許すと云ふ事は反つて熱火アツキを彼の頭に積むのと同様である、而して彼等の寛大が益々汝の罪を醜惡に思はせるのである。

行爲は人生である、幸福と繁榮とは結局それに基づくのである、外圍のものは餘り緊要ではない、自分が影響を及ぼす程、吾々の周圍にあるものは何の影響も及ぼさないものである、日毎自分に注目せねばならぬ、習慣は第二の天性である、「行を播けば習慣を刈り、習慣を播けば人格を穫、人格を播けば運命を收む」(ボードマン)吾々は善か又悪かの何れかに日々少しづつ進んで居るのであるから、夕に至つて善に進んだか否かと云ふ事を反省するのは善い事である。

エマーソン曰く「人間は二つの階級に分たれて居る、——即ち善人と悪人とに、もし汝が後者に屬すれば友人も敵となり、追憶を苦痛に、人生を悲嘆に、世界を牢獄に、死を恐怖にしてしまふのである、又之と反對に汝が他の人の心の中に、輝いた善良な思想を與へ、其人の生涯に楽しい時を與へる事が出来たならば、汝は善い天使の仕事をしたのと同様である」。

各人が日々一時間づゝでも——唯一時間——でなければ半時間だけでも、靜坐して沈黙考すれば非常に結構な事である、時間が無いと云ふ事は云へない、サー・ロバート・ピールは衆議院から帰宅した後に毎夜聖書を一章づゝ讀むのを習慣として居た勿論當時の議會は現今の様に長く時間が掛らなかつたのではあるが。

善を考へよ、さすれば悪を行ふ筈がないのである。

死と審判サバキ、天と地獄を考ふる人は

惡を爲す事能はざらん。

(サー・フーター・ラレー)

其の報は偉大である、

我が子よわが法を忘るゝなかれ

汝の心にわが誠命をまもれ、

さらば此事は汝の日をながくし、

生命の年を延べ平康をなんぢに加ふべし。

(箴言)

自分を修養する事を延ばしてはならない、又青年であるからと云ふ口實をも設けてはならない、マルゲリット・ド・ヴァロア（佛國の閨秀作家）がかう云つて居る、「吾々の骨の上に一塊の肉も無くなつてしまつた時こそ、吾々凡ての人が全く善良な人になるのである。」

「汝の少き日に汝の造主を記えよ」、吾々が望む様な立派な死を遂げたいのならば、それに相當した善い生活をせねばならぬ、善良な人には死は決して恐れてはないのである、サールウォール監督は愈々最後と云ふ時迄病床にあつて、かう云ふ言葉を七ヶ

國の言葉に翻譯したと云ふ事である、即ち「寐は死と兄弟である、然れば睡眠てふ死より、又死てふ睡眠より汝を再び目醒めさす神の御心に任せ奉る様に心掛けねばならない」と云ふのであつた。

ソクラテスが告訴者の目前に立つた時に彼は、死を宣告された者の様でなく天國へ上つて行く者の様に「語つたとシセロが云つて居る。

セネカ曰く「もし汝が自分の務を勇敢に、残りなく爲たならば如何なる報酬を受けるであらうか、汝はそれを爲たと云ふ報酬を受けるであらう、即ちそれを爲たと云ふことが、既に報酬である」と、吾々は正しい事をせねばならないが、それも御神の約束を望んだり、或は罰を恐れる爲にするのでなく、善を愛する餘りに爲るのでなければならぬ、そは「これらの證明は我が心を喜ばしむる」からである。

徳はそれが既に報酬である、或人には罪より引離す誘導物が緊要であると同様に、神異の報と懲罰も亦實際必要である、スピノザ曰く「余は此の人が如何なる泥の中で惱んで居るかと云ふ事を知つて居る、もし彼が地獄の恐怖に由つて自分を制しないな

らば、彼も矢張自分の慾望を満さうとする人々の一人なのである、而して彼は自分の意思に逆つて迄人の命令に従ふ奴隷の様に、悪い行爲から避けて神の命令を守るのである、其代りに彼の奴役の報酬として、神の愛よりも自分の意に叶つたもつと大きい賜物や、自分が最初餘り好まなかつた徳に應じた其報よりも、更に大なるものが、神から與へられるのを期待するのである」と、又他の所で彼は、敬虔な人々が「審判の日に、神の御前に來て、自分等の敬神の苦しい重荷の應報として計り得ない祝福を賦與されようとして居る」のを諷刺的に書いて居る、「眞實賢明な人に取つては祝福は徳の報ではない、只徳そののみが報なのである、假令それに至る道が峻しくあらうとも―それは卓越せるものは罕である如くに難かしいものである―それは何うしても見出されるのである」。

吾々は完全な人になる事は出来ないと云ふ事を知つて居る、而し乍ら吾々は他の凡てに於けると同様に、人格に於ても完全にならん事を目的とせねばならない、其上、吾々は皆自分の心に確實な指導者を備へて居るのである、然ればもし吾々が只良心の命する通りにさへ動いて居れば惡に陥る事はないのである、何人も望めば自分の生涯を高尙に暮らす事が出来るのである、故に出来るだけ高い理想を常に目前に置く必要がある。

己を高くするに非ずば

人は如何に悲惨なる者なるぞ。

(ヴォーガン)

斯の如く、然り、只斯の如く汝自身を訓練する事が出来れば、もし男子であるならばシエクスピヤーが、マーク・アントニーをしてブルータスに就て云はせた如く汝も確にかく云はれたであらう。

彼の生涯は柔しかりき、

又自然が起立して

「これこそ眞の男なり」と

世界に斷言せしむるほどのもの

彼の心に宿れりき。

もし婦人であるならば汝はこの如き婦人となるであらう。

圓滿なる婦人は氣高きよさしを受けぬ、

誠め、慰め、はた命すべく、

然かも其の心は静かにして

天使の如き光もて輝かん。

(ゾーグゾース)

サー・ラーター・スカットが臨終の床で、ロックハルト(ラーター・スカットの養子にしてスコットランドの詩人、批評家)に與へた最後の言葉は「徳あれ、敬虔なれ、善人たれ、汝が余の如くこの臨終の床に横たはつた時には之の外に心を慰めるものは無いであらう」といふのであつた。

ペーラム(ユーフラテス河畔に在つた易者)すら「願はくばカグシヤト義人の如く我死なん、願はくばわが終オハリ、彼の終りにひとしかれ」と望んだのであつた。

第十八章 平和と幸福に就て

繁榮と幸福は何うしても兩立する事の出来ないものである、然れば富裕に見えて居ても不幸の人が多い、自然は「彼女の愛する最も力強い者」に凡てを與へる事が出来る、富貴、權力、尊稱、長命は此である、而し彼女とても人々を幸福にさせる事は出来ない、然れば人が自分でそれを得んと努力せねばならぬ、浮世の成功を贏ち得た人の生涯は危険と不安に満ちて居る、若し人が自分の手で幸福の要素を得る事が出来ないのならば此の世の美も、變化も、快樂も、興味も、彼に幸福を與へる事が出来ない。幸福は重に思想を抑制したり、指導したりする力に依るのである―苦痛を避け、楽しい記憶を呼び起す事である、シヨペンハウエル曰「或人には此の世の中は無趣味で、陰鬱で、淺薄であらうし又他の人には潤澤で、面白くて、意味深いものであらう」、幸福はヴァイオリンの様に練習される筈のものである、もし吾々が善い方法を取ればそれは必ず來るであらう、而し餘り好奇の念を以て求めてはならぬ、もし強ひてすると

吾々の最も大きい喜びは地獄に逝つてしまふ、而し吾々がもし「オーフニアス（彈琴の妙よく禽獸土木を感動せしめしと云ふ古ギリシヤの樂人）の如きであれば其喜びを呼び返す事が出来るであらう」し（ダラス）「快樂を去れば再び來つて汝の後に従ふであらう」。（フランクリン）

餘り自分の事計り考へてはならない、世界中で汝のみが人ではないのである。

ラスキン曰「自分から娛樂を求めてはならない、常に自分が他人に喜ばれる様に心懸ねばならない」、斯の如きは些細な事であるが人生を快樂で満さんには大切な事である滑稽の感じは人に特別に與へられた天よりの賜物である、動物が理性を持つて居るか否かと云ふ事は疑問であるが、彼等が愉快を感じる賜物を持つて居ない事は明白である、キャンホート曰「吾々が只一日でも笑はなかつたならば、多くの日を失つた様に思はれるのである」、楽しさうな笑聲を聞く事は非常な愉快ではあるまいか、それは何んなに凡てのものを輕快にするであらう。

心樂しければ終日歩み得れど

心悲しければ一哩にて疲れ果つ。

（シエクスピアー）

陰氣な日があれば笑つてそれを輝かしい日に變へよ、吾英國の或監督が「キリスト教の十分の九は善誼を教へて居る、而して上機嫌で居たいと云ふ秘訣は腹立たしい思想から逃れる事である、汝の機嫌が害はれたならば怒りて日の入る迄に至つてはならない」（エピッスル）、争を爲るのには二人居なければならぬから其内の一人と成つてはならぬ。

汝が自分の事のみを考へると悲哀を感じるであらう、而し他の人を思へば反つて幸福を感じるのである、シエルブリエ曰く「人は只だ我を忘るゝ時にのみ心を安む」と、自分を忘れると云ふ事は他のものを忘れぬと云ふ事よりも更に大切である。

絶えず不平を云つて居る人が往々ある、斯の如き人は假令エデンの園に生れても不平を云ふ種を見出すであらう、それに反して何處に居ても幸福に思ふ人がある、其人等は彼等のあらゆる周圍に美や祝福を見出す人である、

恐れも地下に埋められ、

望も消えず愛も朽ちせざらましかば、

如何なる天の下にか此の世は在るべき。

(モリス)

快活は非常に利目のある道德の強壯劑である、日光が花を咲かせ實を結ばせる如く快活は、即ち自由と生の感じは、吾々の内に善き種、吾々に最も善きものを吾が内に發達させるのである。吾々は自分のみでなく他の人々をも快活にする義務がある、古の傳説に虹が地上に觸れた處には黄金の杯が見出されると云ふ美しい話がある、其の通り、その微笑、その聲音、その存在が日光の光線の如く思はれ、その觸れる所悉く黄金に變る様に思はれる人々がある、人と云ふものは自分が快樂を持ち得る限りは決して煩悶しないものである、「快活な心は自分も楽しむと共に他の人にも果てのない酒宴である(バックストン)、フロレンス・ナイチンゲールの存在は彼女の興へた樂其の物よりも更に多くの人を癒したのであつた、もし吾々が他の人の重荷を幾分でも負

ふと吾々の重荷も亦軽くなるのである。

或人は快活が無分別を含んで居ると想像するが、快活と無分別の間には必然の關係は無いのである、アーノルド曰「地上の祝福の内最も大なるもの、一である輕快な精神は、熱心な思想や柔しい愛情の周圍に存在する事が屢々ある、而して此の快活な精神は、神の前に痴者と見える人間の淺薄や頑固に、其の思想や愛情が加はつたよりも更に美しいものである」。

世の中には生れながらにして生涯中働らかねばならない運命を持つて居る人々が澤山ある、而しそれは、貧しい人にのみ限られては居ない、富める者も今は一生懸命に寧ろ、夢中になつて働いて居る、それに拘はらず金錢を持つて居て反つて不幸な人が何の位あるであろうか、其人の生涯には休息も靜穩も平和もないのである、吾々は此の世に於て苦難を避ける事は出来ないがそれに超越する事が出来るのである、さうするには吾々の記憶の部屋の壁に美しい畫と幸福な思ひ出を懸けねばならぬ、吾々が、睡眠の楽しい夢だけでは不十分ならば少くとも目醒めて居る時間を楽しい空想で満す事

が出来るのである。

凡ての人々は皆自分を樂しませたいと望んで居るが實際に自分を樂しませる手段を知つて居る人は少ないのである。而して手段を知らない其人等は人生の尊い事も樂しみも又知らないのである。

吾々は苦難や悲哀を避け得るとは豫期出来ない、而し吾々はそれを喜んで受けるか又は嫌々それに服するかの何れかを擇ばねばならぬ、ウエスレー曰「念は苦難や悲哀に遭ふたが、神の御恵に由つて、それが爲に自分を亂す事はしなかつた」と、小さな困難を大きな困難の如く誇張してはならない、吾々は眞面目な事柄を軽々しく見たり鎖細な事を眞面目に考へたりする癖がある、シセロ曰く「宇宙の永遠と廣大とを熟知して居る人々には此の世の中のどんな困難が大きく見えるであらうか、賢者には人間の智識或は此の世の短い時間にある何が大きく目に映るであらうか、其の人等の心は常に超越して居るから、何事も不意に彼の目前に起る事が出来ないのである、凡人は只、徒に自分を惑亂させて居る、ルクレシヤス曰「或人々は小兒が暗黒を恐れる様に光を恐れる」と。

に光を恐れる」と。

時は傷を癒す如く悲哀をも癒すのである、又吾々が自衛せねばならないものは死ではない、只誘惑のみである、バックスター曰「人々は往々天を地獄の火と比較して天が地獄の盡きざる火よりも善いと考へて居る様に思へる、而し天を地上の幸福と比較する事は餘り望ましい事ではない」。

「修養された心を持つて居る人、と云つても余は哲學者を意味するのではない、而し智識の泉が心にある人、又は或程度に其の才能を發揮する様に教へられた心を有てる人は周圍にある凡てのものからも、限りの無い興味の源泉を見出すであらう、自然の事物に、藝術の完成に、詩の想像に、歴史の出来事に、過去現在に亘る人間の行路に、又未來の期待に。而しこれらに無頓著になつたり、その千分の一も空費しないで置く事も出来るが、それは人が、初めからこれらに道德的又は人としての興味を持たない時とか又は只自分の巧奇心を満足させる時とかに限られるのである。」(ジョン・スチュア

ト・ミル)

吾々は花や、木や、草や、川や、湖や、海、山や太陽等の世界に住んで居る、自然は輝きに輝いて居る、而して自然に由つて慰を受ける人々にはそれが非常な慰安となるのである。

輝やける朝は静にして美しく、

香へる霞は空に在り、

さても柔かなる朝かな、

行かんとする年に腕を捲き

幸ある夢に過ぎし世をくちつけんとて

春は再び廻り來ぬとぞ思はする。

(モリス)

而し自然の美を享けようとするならば吾々は美的情操を持たねばならぬ、犬や象の理性に關しては度々研究されて居るが、世界に於ける最も美しい光景がどの位快樂を與へるであらうかと云ふ事は想像だにされて居ない。

吾々は時々人が所在ない—即彼等は何もする事が無いと呟いて居るのを聞く事がある、而し所在ないのは其の罪自分にあるのである、もし教育があつてしかも富、目、手、余暇を持つて居て其上或目的物を望んで居るならば、全能の神は反つて多くの祝福も受けて居ない人にそれを與へ給ふであらう。(サウシー)

富も位も幸福を與へる事は確に出来ない、愛や慈悲や心の平和がなくても、汝は富貴にも、偉大にも、勢力家にもなれるが只汝を幸福にする事は出来ない。

ペルシャにかう云ふ物語がある。それは、偉大な王が何うしたのか鬱々として元氣が無くなつて毎日彼の占星家に慰められて居た、或日、全く幸福な人のシャツを著たならば必ず幸福が得られると云ふ事を聞いたので國中探されたが無駄であつた、さう云ふ人は何うしても見出す事が出来なかつたのである、遂に仕事から歸つて來る或労働者が此の狀件を具備して居た、彼は全く幸福であつたのである、處が生憎や、この人はシャツを持つて居なかつたと云ふ話である。

幸福は金錢で購はれる事も勢力で握られる事も出来ないのである、王冠でさへも棘

で内面が覆はれてるのである、ハイエロがサイマナデイスに「人類の最大部分は王位の華麗に眩惑されて居るが余はかゝるものには少しも驚かない、そは多くのものは外見で人々を幸福であるとか不幸であるとかと判断する様に余には見ゆる、之は經驗から推しても分る事である、サイマナデイスよ、余は汝にかう云ふ事を斷言するそれは王者と云ふものは外見程大なる快樂を享有せず反つて惡を所有するものである」と。

ガイヂエスの指輪はそれの持主には只平和と幸福の外は何んでも持つて來る事が出來た。

汝もし不幸に陥るともマツションの次の言葉を聞けば慰められるであらう「不幸とは何處から來るか。汝が下界に於て、その所を得ないからではなからう、そは汝が上天の爲に生れたからである。地球が汝の國ではないからである。而して神の爲でないものは皆汝の爲のものでないからである」

「快樂の種々異つた光や、善の美しさを語るのは全く當惑してしまふのである、吾

々が最大の善について云ふ事が出来る事は、善には知られない又説明も出来ない魅力がある云ふ事であり、又吾々が最高の祝福について云ふならば、それは云ひ難きものであると云ふより外はないのである」。(ペーコン)

吾々は偶像を禮拜する傾向がある、「吾々はバンでも無いものに金錢を費し自分を満足させないもの、爲に勞働して居る、(イザヤ)而しもし吾々が正しく注意すれば吾々はダンテの言葉に共鳴を感じるであらう。

吾が見しものはみなゆかし、

宇宙の微笑は萬物を含めり、

ならびなき楽しみ云ひ難き喜び、

平和と愛の朽ちざる此の世、

底ひなき富、はかり難き恵。

宇宙にある萬物は聰明な惠深い法則で治められて居て、皆其間に或る關係があつて、皆一様に善の爲に働いて居るのである、もし吾々が苦しむ事があればそれは自分の罪

か又は一般の平安の爲かである、セネカ曰「努力して居るのに汝を幸福にさせない義務も無ければ、又避ける手段のない誘惑もない」。シセロの言に由るとエピキユラスはかう云ふ事を云つて居る、それは「要求には三種ありて第一は自然の又必然の要求、第二は自然のものはあるが不必然な要求、第三は自然の要求でもなければ必然の要求でもないものである、而して必然な要求は大した困難も費用も掛けないで満す事が出来る、又自然であつて不必然な要求は左迄多く満さなくても善い、そは自然が自分で十分満足の出来る富を、得た物と、制限された量とで容易く造るからである、而し空なる慾望に向つては自然は制限をも中庸をも見出す事は出来ないのである」。

而し人生を十分に楽しまん爲に、吾々は自制し、多くの狂熱的な快樂を棄絶し、自分については出来るだけ少し考へて、他人の爲に盡す様に用意せねばならぬ。

シエルブリユ曰く「己を忘るゝ事によつてのみ心安んせらる」と。

幸福は放縱よりも克己に由つて多く得る事が出来る、眞の喜悅で満てる感情も吾々が之に耽溺すれば、古のシレンの如く人生の渦中や巖頭で吾々を滅ぼしてしまふので

ある。

人の心に従はざる者は、

如何に幸にはぐまれけん、

其人の武具は正しき思想、

其人の手練こそ純なる眞理なれ。

(ラットン)

吾々が余暇を多く持たないと云ふ事は吾々の時代の一代不幸である、吾々は絶え間のない渦中に住んで居るのである、どれだけの婦人が、又同様にどれだけの男子がボイシャの云つた「私の小さな身體はこの大きい世界で疲れてしまつた」と云ふ句に共鳴するであらうか。

而し急いで善い仕事が出来ない、考へるには時間と静寂とが必要である。

キングスレー曰「吾々は心、即ち、胸と頭の休息が必要であると云ふ事を知つて居る平静な、しつかりした、我慢強い克己の出来る人格には獎勵をする必要はない、そは

意氣銷沈と云ふ事がないからである、又麻醉剤の必要もない、それは刺激が起らないからである、又それは制慾の必要もない、それは神の賜物を悪用せずしてよく使ふのに十分強いからである、一言に云へば人格は只食物にのみ限らず、それは古のアダムも犯した様な、狂妄な貪欲や、野心から来る多くの欲望、思想、行動、を真に節制し、光と生命を求めそれによつて疾病と死とを見出す事である、然り、余は之を知つて居る又其休息も汝がそれを見出せし處にのみ在ると云ふ事をも知つて居る」。

エピクテータス曰く「ゼウス（ギリシヤの主神ジュピター）が定めし如く行へ、もし其の如く行はずんば汝は刑罰に處せられるであらう、而して其刑罰とは如何なる罰であらうか、汝が己れの義務をしなかつた以上汝は謙遜と忠實と禮儀の性格を失ふのである、これよりも大なる刑罰が果してあるであらうか」。

自分で困難を造つてはならない、もし不幸が來たらばそれを利益に變へる事が出来るか如何かと云ふ事に注意せよ。

ラスキン曰「吾々は餘り多くを要求し過ぎるので不平が生ずるのである、吾々は選

擧を要求し、自由を要求し、娯樂を要求し、金錢を要求するが吾々の中の誰が、平和の要求を感じ、それを知つて居るであらうか、もし汝がそれを要求するのならばそれを得る二つの方法がある、第一は全然汝の力に依つて居る、即汝自らを楽しい思想の巢となす事である、……吾々の中では、それを知つて居る者は未だ誰もないのである、そは何人も青年の時に、如何なる逆境に在つても、美しい思想で蓬萊宮をつくる事が出来ること教へられなかつたからである、輝いた空想、満足な記憶、高尚な歴史、忠實な諺、貴い静かな思想の寶庫、それは心勞も邪魔する事が出来ないし、苦痛もそれを曇らす事が出来ない、貧困もそれを奪ひ去る事が出来ない、「苦痛もそれを曇らす事が出来ない、貧困もそれを奪ひ去る事が出来ない」、其の家は、吾々の心が其の中に住まふ様に造られたのであつて、手で建てられたのではない」と。

吾々は死を恐れる必要はない、或有名なストア學派の道德家曰「死は吾々が感知する事の出来ない悪である、吾々が此の世に存在して居る間は來ない、而し死が吾々に來る時には最早此の世に吾々が存在して居ない時である」。

聖トーマス・ア・ケンピ曰く「慾望を捨て去れば汝幸福を見ん」と、吾々は人生に於て大なる事で苦しむと同様、小さな事柄にも悩まされて居るのである。聖經にかう云ふ事が語られてある、「強い肉體より優つた富もないし、又心の悦よりも尊い悦もない」と。

善良な又偉大な帝王アントニナスが終焉の床に宿衛トナリの人に與へられた最後の箴言は「沈著」と云ふ言葉であつた。キリストの生涯の沈著は何ものも破る事は出来なかつた、キリスト曰「吾がくびきを負へ、しからは爾曹心に平安を得ん」。

吾々は自分の幸福を他に求めてはならない、只吾々自身の中に又吾々の心の中に見出さねばならぬ、「天國は爾曹の内であればなり」、吾々が此の世に在る時ですら幸福を得る事が出来ないならば、天國に行つても如何して幸福を得る事が出来るであらうか、神は此の世に在る時よりも、もつと吾々に氣をつけ給ふであらうか、吾々が此の世で平和を得る事が出来なくて如何にして天國に在りて平和を見出し得るであらうか、吾々から平和を奪ひ去るものは何であらうか、そは誇、貪慾、我儘、野心等である、

而し斯の如きものなかりせば、吾々は如何に此の世で幸福であるかもしれない、是あるが爲に吾々は何處にも幸福を見出す事が出来ないのである、吾々の大切にしているものを失ひはしないであらうかと云ふ不安を此の世でさへ持つならば、まして天國に在る時は猶更この不安を持つであらう、もし吾々が此の世でさへ他人と仲よく生活して行く事が出来ないならば、何處で仲よくしたいと云ふ望を得る事が出来るであらうか、吾々が平和と幸福の基を外部のものに置いて、他の世界を只管求めるならば、吾々は次の世界にあつても満足せずまた第三の世界を求め、かう云ふ風に次々と求めて止まないであらう。

幸福が期待と、享受と、記憶の三段に祝福されて居る事が事實である以上は幸福の大きい、純なる源泉は、期待に有かもしれない、即ち吾々が愛別離の悲をしたものに再び逢ふ希望、又吾々に今隠されてあるものを、もつと明かに見ようとする期待にあるかもしれない、余はこの慰安や喜びの源に反して言ふべき言葉を持たぬ、吾々は現在享けて居る祝福をも輕視したり背恩であつたりしてはならない。然ればケープルと

同じく汝自身もかう言ひ得る様に努力せよ。

オ、主なる我が神よ、君の聖旨をなし給へ、

聖旨ならば吾は静かに横たはらん、

吾は必ず動くまじ、

御神の胸に安らげく吾等を休はせんとして、

吾を寝さす呪文を破らず、

離れまつらじと、吾を抱き給ふ御手を。又汝は只自然の静寂を楽しむ事も出来る、

黙せるは星の閃めく空

眠れるは静けき山の中。

(ラーヅラーズ)

然らば天使は必ず汝の家庭に来るであらう、丁度其の昔マムリの野でアブラハムに天使が現はれた様に。

「人々に知られざる多くの新しい喜びがある、人はそれを文明の赫々たる道を行くに従つて見出すであらう」(マンテガザ)と云ふ事は不可能の事ではない。

「靈の同伴者であり又其れの隷屬たる肉體を靈が賢く命令し、或は柔しく治め、有益に氣をつけ、十分に供給し、慈愛深く導く時には靈と肉體とで完全な人が出来上るのである、而し若し肉體が法則をつくり、慾の激しい力で最初に理解力が害され次に意思、選擇の尊い部分迄も侵略されるならば肉體と靈とは適當なる伴侶ではない、又この如き靈と肉體とでつくられし人は愚であつて悲惨である、もし靈が統御せなければそれは伴侶となる事が出来ない、即ち靈が肉を統御するか肉の奴隷となるか何れか一方でなければならぬのである」。

吾々が人生を楽しまぬは 罪吾々に在るのである、ラスキン曰「事業を成就し得る人は稀だが凡ての人が楽しまれる」と、心を平和に、幸福に保たんにはそれを聰明な高尚な思想で満たさねばならぬ、プラトー曰「神聖とは美、智、善及びこれに類したものである、靈の翼は斯の如きものに育まれて成長するのであるが、若しそれが惡に由つて養はれる靈は悪くなつて尾羽打枯れてしまふのである」。

然れば選擇を賢くせねばならない、而して

喜びを家庭^{ホム}に來らせよ、

汝の心に喜びを入れ

それを養ひいつくしめ、

されば汝に歌うたはん、

田にて働く折々に

清き朝に働く折に。

喜ぶ事はいとも美し、

歡喜は御神の御惠なれば。

(ヂエーン・インヂエロー)

ソクラテス曰く「聖人とは自分を安全なる者にしようとして努力する人であつて、最も幸福な人は自分を完全な者にしようとして居ると感ずる人々である」、汝の生涯の業が遺憾なく實行されたと云ふ悦ばしい意識を得る様に努力せよ。

第十九章 宗 教

神學としての宗教は學者にさへも猶不可解であるが、義務としての宗教は小供にさへも了解出来るのである。

ジエレミー・テイラー曰く「義務の道はアポロの託宜の様に二様に解釋せられたり、錯雜した方法に表はされたり、眞の意味を秘したり、其手段も疑はしく、豫期に反して行はれる様なものではない、義務の道に表はれて居る神の御言葉は天空の様に萬人に明かで、月の様に輝き、太陽の光線の如く清々しいものである、而して何事か漠然とした時には神の御言葉はそれを吾々に深させる、而しそれも罪の下に吾々が行く事を許さないのみか、明瞭に解らせるまでは止まないものである。(アポロはギリシヤのジユピターとセトとの子にして音楽、詩、醫療、豫言等の神)、辯才のある聰明なフリーカー曰く「薄弱な頭脳を持つた人が、假令神の御名を高めるのが務であり楽しみであるにしても、いと貴き神の御業に餘り深く立入るのは恐れ多い事である、眞實、神の

全體ではなくとも又十分に彼を知る事が出来ないにしても、神を知つて居ると云ふ事が吾々の眞正の智識である、又神に關する吾々の一番安全な演説は沈黙を守る事である吾々が何も告白しなくても神の榮光は説き明し難い程立派であるし、神の偉大な事は吾々がそれを受け得る能力と達し得る範圍の上にあるのである、神の廣大無邊な事や圓滿完全な事は心も言葉も及ばないのである」。

ロツクが子供について云つた事は大人にも確に適用されるのである、曰く「彼等に神に對する愛と、尊敬を浸み込ませよ、これを第一に教へねばならないが此の事柄を深く説明する必要はないのである、何故なれば、餘り早くから靈魂に就て語つたり、無限なる神の不可解な性質を年も考へずに彼等に了解せよとすると、子供の幼稚な頭腦が虚偽で満されるか、或は神に關しての不可解な思想で満されるかもしれないのである………又凡ての人が不可解として満足せねばならない神に就て餘り好奇心を起さずに、神と云ふ單純な思想で安じて居る方が善いと余は思ふ、自分等が知る事が出来るものと、知る事の出来ないものとを區別する程の確固とした明哲な思想を

持つて居ない多くの人々は往々唯一の神を自分等と同様に看做して、邪教や無神論に入つたり或は（自分等が何者をも理解する事が出来ないので）何ものをも信じない様になるのである」。

ローウエルは特別の尊敬を以つてジョンソンの云つた事を常に引用して居る、それは「吾々の知力を超越する或もの、過去距離をつくり或は未來をして現在よりも卓越せしむる或ものは實在と云ふものを吾々に考へさせて吾々を高尙な方に導くのである神學と教理とは宗教の學問ではあるがその要素ではない、ドラモンド曰く「キリスト教が成功した所以は、其教が只神性のものであるのみならず又人性をも兼ねて居るからである」と、日常生活に於ける宗教は行爲を統御し、幸運を保護し、逆境の慰安となり、不安の救済となり、危険の避難所となり、悲哀の慰藉となり、平和の港頭となるのである、或意味に於て宗教は靈的なると同様に物質的である、心と同様に肉體も尊敬をもつて取扱はれねばならぬ、フィヒテが「宗教と云ふのは人が自分の職業から離れて、或る定まつた日に、定まつた時間に營む様な事務ではない、それは或場合

に、變化も邪魔もなくして定められた道を續け、又は吾々の凡ての思想或は動作に浸潤し、それを鼓舞する心意であつて、吾々の心の一番奥にある可きものである。」

聖書は隱微な定義で吾々を迷はす事はしない、寧ろ其の様な空論から吾々の思想を變へてしまふのである。

モーセ曰く「我が今日なんちに命する誠命は汝が理會がたき者にあらず、また汝に遠き者にあらず、是は天に在るならねば、汝は誰か我らのために天にのぼりてこれを我らに持くだり我らにこれを聞せて行はせんかと曰ふに及ばず、また是は海の外にあるならねば汝は誰か我らのために海をわたりゆきて、これを我らに持きたり我らにこれを聞せて行はせんかと曰ふにおよばず、是言は甚だ汝に近くして汝の口にあり汝の心にあれば汝これを行ふことを得べし。(申命記)

キリストに問をかけた教法師にキリストが斯ふ答へ給ふた。

爾心をつくし

精心を盡し

意を盡して

主なる爾の神を愛すべし

これ第一にして大なる誠なり。

第二も亦これに同じ

己の如く爾の隣を愛すべし。

凡ての律法と豫言者は

この二つの誠に由れり。

(馬太傳)

聖徒デエームス曰く「神なる父の前に潔くして穢なく事することは、孤子と寡婦を其患難の中に眷顧また自ら守て世に汚れざる是なり」。

吾々は自分等が何處より來り、何處へ行くのであるかと云ふ事を語る事は出來ないのである、又何を考へ何を信するかと云ふ事をも確められないが、吾々の心では何日でも何をなす可きかと云ふ事は十分に知りぬいて居る、吾々の隣人にする務は神にな

す務の一部分である。

中世紀時代の盜賊の中で自分の事を「神の友であつて人間の敵である」と説明して居るものがあつた、斯う云ふ口實を持つて居るものは、何の口實も持たずして神の名を汚して居る人々よりは、確にキリスト教の眞の精神を、十分に間違はずに理解して居るのである、神を愛する事は人を愛すると云ふ具體的な事實で最もよく示されて居る。

吾々が外の人に對して不平を云ふのであつたらば、「もし汝を自分の望む者とする事が出来ないならば、何れの點より見ても汝は人を自分の心に叶ふ様にする事は到底不可能である(トーマス・ア・ケムド)」といふ事を記憶して居ねばならぬ。

又もし吾々が不平を云ふ原因があれば、吾々が人に許されたいと望む如く吾々も許さねばならぬ、といふ事を聞いた事がある、それもペテロが云ひし如く「七度迄」でなく「七度を七十倍する迄」(馬太傳)許さねばならない、吾々が人を許さないで何うして人に許される事を期待する事が出来ようか、與へる事と許す事は吾々が享受せ

る二大特權である、吾々は凡てを許し凡てを人に與へる事が出来る、金銀ばかりでなく少くとも同情、助力、親切等を與へる事が出来る。

多くの人々は、苦痛の恐ろしさの方が幸福の望よりもはげしい感動を與へるものである。

寢臺に死して地獄へ落ち

其地獄にて永久に

盡きざる苦痛を味ふは

苦しきものと心より

或はしばしば思ふ人こそ

全ての世界を得る爲に

一つの罪も犯さざれ。

吾々は神の誠を怠り或は神の約束を賤めてはならない、「なほ片時のあひだ光な

ちらと借にあり、光ある間に行て暗に追及れざるやう爲よ暗に行く者は其行べき方を

知らず」。(約翰傳)

凡て我がこの言を聽て行はざる者は沙の上に家を建てたる愚なる人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てば終には倒れて其傾覆おほいなり、しかし之に反して凡て我この言を聽て行ふものを磐の上に家を建たる智人に譬ん雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ども倒るゝことなし是磐を基礎と爲たれば也」(馬太傳)就中人を惑はす者特に青年を惑はす者は禍なるかな。

躓さるゝ事必ず來らん、其を來らす者は禍なる哉、この小子の一人を躓するよりは磨石を頸に懸られて海に投入れられんこと其人の爲に宜るべし」(路加傳)

もし人全世界を得とも其生命を失は、何の益あらん乎、また人なにを以て其生命に易ん乎」(馬太傳)

而し吾々が事々物々に罪を犯して居るからと云つても何人も絶望する必望する必要はないのである、「生命の源を岩から湧出させる宗教のくすしき苦を持つとは敢て言はぬ」とシャトリアンは言つてゐるがキリスト教は恐怖の宗教でなくて希望の宗

教である、ジューベル曰く「神の怒は暫時にしてその恵は永久である」と、又語を加て曰く「神に對する畏れは吾々を道德の道に導かうとするのに必要なのである」、吾々は又思想に於てもラレーが云つた言葉に同感するのである。

死と審判、天と地獄を

屢々考ふる人は行をよくせよ。

人は追はるゝよりも導かるゝ方が容易であるし、實例は教訓よりも有効である、宗教裁判の恐怖を非難する人の多くは、「日々形式的にキリストを十分づゝ禮拜するよりも、若し相對して心からそれをするのであつたならば、只二分間で生活の全部を善い方に容易に變へる事が出来るであらう」と云つたドラモンドの言の眞なるを肯定するであらう。

善を思ひ惡を行ふなかれ「凡そ眞實なる事、凡そ敬ふべき事おほよそ公義こと凡そ清潔こと凡そ愛す可き事おほよそ善稱ある事すべて何なる徳いかなる譽にても爾曹これを念ふべし」(腓立比書)罪惡は、心に考へない間は決して實行するものではない。

セネカ曰く「汝が人に知らせたくないと思ふものを神に求め、或は神に知らせたくないと思ふものを人に求めてはならない」而し無限の時と場所にある吾々が、蜉蝣の様に短命で小さいものであると云ふ事を考へた時には、吾々はスペンサーと同様にかう尋ねるも尤であらう。

天つ國にもうれひありや

卑しき人間に對し天つ心に愛ありや。

聖詩作者がかう云つた「余が天國や、神の御手の業や神が定め給ひし月星について考へる事が出来ても、神が意を注ぎ給ふ人とは何であるか、或は神が下し給うた人の子とは何であるかと云ふ事に迄自分の考は及ばない」。

而しコルリツヂの答に由つて吾々は慰められるのである即ち

人が助を求むれば聖徒は助を與へやせん

頭上に高き青空は助けんとてや覆ふなる。

吾々は「求めよ然ば與へられ尋ねよ然ばあひ門を叩よ然ば開かるゝことを得ん」

(馬太傳)と云ふ約束を興へられては居ないであらうか。

又「爾曹すべて我名に託て求ふ所^{ヨリ}のことは我すべて之^ヲを行ん(約翰傳)もし爾曹吾に居らば又吾が言葉爾曹に居らん爾曹の望むものを求めよ然らば爾曹に行はれん(約翰傳)と云はれてある、神に「凡ての心は開かれ、凡ての望をも神は知らる」と云ふ事や、又神は悔める心の嘆息も、悲しめる心の慾望も、賤しめ給はず、「爾曹の憂慮^{オモヒワズラフ}と^{オモヒ}ころを悉神に託ぬべし蓋かれ爾曹を顧み給へばなり」(彼得前書)と云ふ事をも聞いたのである。

吾々は自分が安逸にしたい爲の口實として上よりの援助を期待してはならない、而し吾々は上よりの援助を確保されてゐるのみならず、「主が家を建て給ふに非ずんばそれを建てる人々の勞力は徒勞である、又主が都を守り給ふに非ずんば番人が目を醒して守つて居てもそれは空である」又「凡ての善賜^{ヨキタマヒモノ}と全き賜^{モノ}はみな上より諸の光明^{モロクヒカリ}の父より降るなり父は變る事無くまた轉動^{マハリ}て顯るゝ影もなき者なり」と語られてゐる。

キリスト教は來世の爲に此の世を犠牲に供せよと我々に奨めては居ない、而し「命

せられたものを愛し、約束されたものを切望する」と云ふ事は、此世に於けると同様に向後も吾々の幸福を増加するものである、此の世の智慧と天の知恵との間には全くの相違と云ふものがない、それは宗教は日常生活をも純化してしまふからである、

浮世はなれし庵に住みて

人にも業にも離るゝ要なし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

如何に普通なる業すらも、

吾が求めに應ずべし、

吾に打ち勝つ機会をも

神に近づく道をも與へん。

(ケーブル)

イエスは使徒等に就てかく祈り給ふた、「われ爾に彼等を世より取給へと祈らず惟かれらを守りて惡に陥らす勿れと祈る」(約翰傳)

プラトーンやアリストートルやエピクテータスに又セネカやマーカスオーレリアスには高い情操があつたけれど新約聖書にある様な愛の福音は缺けて居た。

イエスがキリスト教を新しい教と云はれたのは眞實である、「われ新誠を爾曹に與ふ即ち爾相愛すべしとの是なり、我なんぢらを愛する如く爾曹も相愛すべし爾曹もし相愛せば之に因て人々爾曹の我弟子なる事を知べし」(約翰傳)

又我この事を爾曹に語るは我が喜なんぢらに在て爾曹の喜を盈しめんが爲なり我なんぢらを愛する如く爾曹も亦たがひに愛すべし是わが誠なり、人その友の爲に己の命を捐るはこれより大なる愛はなし凡て我なんぢらに命する所の事を行はば即ち我友なり、今より後われ爾曹を僕と稱す蓋僕は其主の行ことを知ざればなり我さきに爾曹を友と呼り我なんぢらに我父より聞し所のことを盡く告じに縁る」(約翰傳)

キリスト教の顯るゝや「天上ところには榮光神にあり地には平安人には恩澤あり。

(路加傳) と告げられたのであつた。

イエスは特に幾度も罪を許す事と敵をさへも愛する事とでキリスト教とモーゼの教

とを比較し給ふた。

「爾の隣を愛みて其敵を憾べしと言へること有は爾曹が聞し所なり然も我なんぢらに告ん爾曹の敵を愛み爾曹を誣ふものを祝し爾曹を憎む者を善視し虐遇迫害ものゝ爲に祈禱せよ、如此するは天に在す爾曹の父の子とならん爲なり夫天の父は其日を善者に悪者にも照し雨を義者にも義しからざる者にも降せ給へり、爾曹おのれを愛する者を愛するは何の報賞かあらん税吏も然せざらん乎、安否を兄弟にのみ問は人より何の過たる事があらん税吏も然せざらん乎是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし」(馬太傳)

吾々は困難や悲や不安を持つ事を豫期せねばならないが「患難も欣喜ぶべし蓋患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生ずるから」。

(ローマンス)

又吾々は「この現在のなやみも示顯される榮光と比べると價值のない」(ローマンス)と云ふ事、即「神の國を、愛する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見す耳いま

だ聞す人の心いまだ念ざる者なり」(哥林多前書)といふことを確に知つてゐる。

エビクテータス曰く「他の歡喜の場合にもこれは代用されるのである、即ち汝が神に柔順であり言葉でなく行爲に於ても汝が善き人の如きであつたと云ふ意識である」而るに實際人々が自分の宗教の爲に盡して居る事の微々たることよ、彼等は只「宗教の爲に口論し、いさかひをなし、罵言雜言し、隣人をも惱ませ、激させて居る、又宗教の爲に戦つたり、その爲に生命を失つたりして居る、而して宗教に應じた行爲でない事をして居るのであつて、心からその爲に盡して居る人は極罕で恰皆無と云ふ位である」。(フリスマル)

トーマス・ア・ケンピ曰く「長途の旅は僅かの費用で企てられるのである而して永生の爲には地上から一足だにも上げる人は多くないであらう」と、又曰く「著述、讀書、悲歎、沈黙、祈禱、困難は堂々と吾が生涯に來るのである、永生は凡てこれ等のもの、否これにも優つた價值があるのにそれを要求する人は極少數である」と。

ミカ曰く「エホバの汝に要めたまふ事は唯正義を行ひ憐憫を愛し謙遜て汝の神と、

もに歩アユむ事ならずや。」

假令吾々に多くのものが期待され、大なる犠牲が要求され、此世にある凡てのものを吾々が見捨てる様に要求されるにしても、所詮人生は短いものに過ぎないではないか。

浮雲かけを投げる時、

日は夏草の上を走るなり、

さながら神の御前にも、

地上の月日は過ぎ行くよ、

果なき軍イッサの年々は

あわたゞしくも過去りぬ、

誇りし地上の名聲は

しばしきらめき消え行けり。

(ブライアント)

とはいへ吾々は勿論正しい心を以てかう求めねばならない。

吾に君の在アす如、我はならんと努めなん、

如何なる道を我行くも、君の御爲になさばやな。

(ソーロー)

かう云ふ精神はそれ自身已に報いられてをる、そは宗教の契約は來世とは限つて居ないのである、今、此處で、直ちに初まるのである、吾々がもし清く保たうと願ふならば、自分の心に生ける水の泉を持つ事も出来るのである、

俗ならぬ感情も與へられたり人々に

天キヨラカのそのの如清純ならずとも。

(スカット)

シセロが眞理を語つて居る、「善良な人の外は、誰も幸福でなくて、只善良な人のみ幸福である事が眞實とすれば、哲學よりも何がもつと研究される筈であるか、或は何が徳よりももつと神聖であるか？」と、

人が堪へ得られぬ程の誘惑はされぬと云ふ事は、疑ふべくもない眞實であるけれど

も一寸信じ難い様に思へるしかし「神は信なる者なり爾曹の耐忍ぶこと能はざる試
 惑に遇せし、爾曹が其試惑を耐忍ぶ事を得ん爲に其にそへて逃るべき途を備へ給ふべ
 し」(哥林多前書)然るに「惑に入ぬやう目を醒かつ祈れ、其靈には願ふなれど肉體よ
 わきなり」(馬太傳)と云はれる程人は弱いものである。

吾々は完全を目的とせねばならない「天に在す爾曹の父の全きが如く爾曹も全か
 れ、」さすれば其の報は數へきれない程あつて直ちに來るであらう、吾々の困難の多
 くは吾々自身の中より起るのである、「人は空なる影で自分を亂して居る」吾々の大
 部分の人はダニエルと共に「吾が頭のまぼろしは吾をわづらはす」と云ふ事に一致す
 るのであらう、而し吾々は又平和を保つ事も、爲ようとすれば出來るのであるからそ
 れを爲ないのは吾々が悪いのである、宗教はこの世でも吾々に休息と安全、心の平
 和と、勞心から逃れる事の出來る自由を與へると約束して居る、天國は只來世や遠い
 所にあるのみでなく實に汝の心の中にあるのである。もし汝が疲れ果てた時に「疲れ
 たるもの又は重荷を負へるものよ吾に來れ吾爾に休を與へん」(馬太傳)と云ふ招を

受けなかつたであらうか、「なんぢら心に憂ふる事勿れ神を信じ亦われを信すべし」

(約翰傳)疑で苦しむと云ふ事は信仰の薄い證據である。

吾々が恐怖に眞個の原因をもつて居ない事はたしかである、「たとひわれ死のかけ
 の谷をぬぐむとも禍害をおそれじなんぢ我とともに在せばなり、なんぢの筈なんぢの
 杖われを慰む」不安についても同様である。「なんぢら天空の鳥を見よ稼ことなく穡
 ことを爲す倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり爾曹之よりも大
 に勝る者ならず乎、また何故に衣のことを思ひわづらふや野の百合花は如何にして
 長かを思へ勞す紡がざる也われ爾曹に告んソロモンの榮華の極の時だにも其装この花
 の一に及ざりき神は今日野に在て明日爐に投入れらるる草をも如此よそはせ給へば況
 て爾曹をや、嗚呼信仰うすき者よ」(馬太傳)

「爾曹何を食ひ何を飲んと求むる勿凡て是等の物は世界の邦人の求むるもの也、な
 んぢらの父は是等の物の爾曹に無て叶ぬ事を知る、たゞ神の國を求めよ然らば是等の
 物は爾曹に加らるべし」(路加傳)

繰り返し、く、淳々と同じ教訓が説かれ、同じ聖約が立てられて居る、「蠶くひ銹くさり盗穿て竊む所の地に財を蓄ふる勿れ蠶くひ銹くさり盗穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし蓋なんぢらの財の在るところに心も亦あるべければ也。」又「もし富が増し加はるともそれに心を置く勿れ」貧は然らざれども富は實際不安の源泉である、「財を有る者の神の國に入は如何に難いかな」。

彼のキリストの山上の垂訓で天國に行き得ると約束せられた人々は矜恤ある者、柔和なる者、和平を求むる者、心の清き者であつた。

吾々は神を恐れない様にと教へられた、そは神は吾等の父で居らせられる、そして全き愛は恐を除くものである。

吾々は人を恐れる要はない、「われ神に依頼みたればおそるゝことあらじ人々われに何をなし得んや」(詩篇)

吾々は何物をも恐れる必要はない、實際何にも吾々を害ふ事は出来ないのである、「神を愛する者の爲に委く動きて益をなす」(ポーロ)

これらの約束は吾等凡てに結ばれたのである。富める者、すぐれたる者、賢き者學問ある者のみではなく吾々凡ての爲にも結ばれたのである。(ローマンス)

「孩提を我に來らせよ彼等を禁る勿れ、神の國に居るものは斯の如き者なり。」(馬可傳)

之を信する吾等のみがこの恵を受ける事が出来るのである。

ローマンス曰く「死も、生も、天使も、王者も、權力も、過去のものも、未來のものも、高きものも、深きものも、あらゆる他の有情も、吾が主キリストに在る神の愛から吾々を割き離すことは出来ぬ」と語られてゐる。

只これのみで人生は光明となり、平和は満ち、幸福は溢れるのである。

清くあれ、又正しき事に意を注げ

終の平和を人に齎すものぞこれ

されば汝も天つ御國の「生命の書に録されたる名前」の中に加へられる様に望まねばならぬ。

又人生に於ける汝の運が如何であらうと、何處にそれが擲たれても、汝は只幸福になる事を望ねばならない。

御神の目の至る處

賢き者の港たり

キングスレーの貴き言葉の通にして善ならん事を努力せよ。

賢き人に貴きを得させよ、

只にそれを夢見さするのみならず、

されば生イシチも死トコシも常世トコシに

氣高き妙なる歌とぞならん。

人生の患難や不安や苦難を通じて、「測り知られぬ神の平和は、神の智識と愛の中に汝の情をも心をも共に保ち給ふであらう」と云ふ事を信じて、安心立命されるであらう、然らば神の御恵は汝と共に在り常に汝の手にあるであらう。

格言

家庭の平和と幸福とを高めん爲には次の規定を念頭に置け！。

沮害と失望が日毎に來ると思ひて其の用意を怠る勿れ。

人は不完全なれば、多くを人に期待する勿れ。

各人の性質を研究し了解して斟酌する所あれ。

もし人に悲しみ來らば同情し、喜び來らば共に悦べ。

汝激せば語る事を遅くし、怒れば爲す事を遅くすべし。

人を幸福ならしめん爲に最善をつくせ。

人生を快活に見よ。

長者には尊敬を以つてし、幼者には柔しく語れ。

奴僕には親切に語れ。

公衆の前にて賞め、一人なる時に過を注告せよ。

出来るだけ賞め餘儀なき折のみ非難すべし。

穩やかなる心し怒を轉する事往々あり。

怒るべき時も、汝自ら、時としては過失をなす事を憶へ。

凡ての快樂には人を先にせよ。

人を先にし己を低くせよ。

出来得る限り常に善き意思^{カンガへ}を人に歸して、己之に居るなかれ。

(完)

「人生の利用」の後に

仁村嬢、ニーベリ卿のユース、オプ、ライフを全譯して一閱を乞はる。余は英文の造詣も浅く、備語の素養には乏しく、邦文亦今古の人の精粕をすら嘗むる能はず。余豈其の任ならんや。然れども嬢の努力と熱誠とは余をして自ら揣らす原文と譯文とを一讀せしめたり。原作の内容と行文とに就いては世既に定評あり。譯文は間々微瑕なきを保せず雖も、暢達明快、處女譯としては洵に敬服に堪へざるものあり。憾むらくは余の淺學不文なる、内にひそめる美玉をしてその光を發揮せしむる能はざるを。本書は固より天衣無縫といふべからざれども、うら若き一小女の眞面目なる努力の結晶として、世に推薦するの頗る意義あるを覺ゆ。一言を卷末に附して嬢の首途を祝し刮目して謝辭の進程を觀んと欲す。

高津才次郎識

大正六年十月十四日印刷
大正六年十月十七日發行



人生の利用與付

定價六十五錢

著者 仁村千代子

東京市神田區小川町十八番地

發行者 大野富士松

東京市淺草區猿屋町十七番地

印刷者 小林二十彌

東京市神田區鎌倉町五番地

印刷所 會社共同印刷所

發賣所

東京市神田區小川町十八番地
振替口座東京一四一四六番

大野書店

213025

終